(財)八尾市文化財調査研究会報告12

八尾あれこれ

文化財講座記録集 1

(財)八尾市文化財調査研究会報告12

八尾あれこれ

文化財講座記録集 1

はじめに

昭和二三年四月、河内平野に位置する近隣五ヶ町村が合併し、人口六万五千人の田園都市・八尾市が発足して以来、すでに三九年の歳月が流れました。

当時は雲雀のさえずる自然豊かな都市でありましたが、時代の流れと共に開発の波は遠慮なしに押し寄せ、今では近代都市へと大きく変わりつつあります。

しかし、河内平野は先人の活躍の舞台として重要な役割を果たしてきたところであり、貴重な文化遺産も数多く残されております。

そこで、これらの文化遺産を保護、継承するために、昭和五七年七月、財団法人八尾市文化財調査研究会を設立し、文化財の調査研究を行い、市民文化の発展に寄与すべく、地味ではありますが、日々努力をしているところであります。

先年来、市民の方々に文化財についての関心を持っていただく為、諸先生方にお願いを申し上げ、八尾市に関連する文化財・歴史等についてのご講演を賜りましたので、そのうち昭和五八、五九年度の講演内容の一部を一冊の本にまとめてみました。是非ご講読を願い、八尾市の文化財や歴史を考える参考にしていただければ幸いと存じます。

尚、ご講演賜りました諸先生方に深甚なる感謝の意を表します。

昭和六二年三月

(財)八尾市文化財調査研究会

理事長　**山脇悦司**

目次

大阪湾沿岸の弥生文化　1
環山楼と江戸時代の建築物　31
叡尊の足跡　57
大坂城と八尾　93

大阪湾沿岸の弥生文化

大阪経済法科大学教授
総合科学研究所所長
村川行弘

八尾市域は河内湾・河内湖の時代以来、常に日本歴史の中央舞台で非常に大きな役割を果たしてきた地域であり、皆様方も八尾市史や八尾市文化財調査報告など行政資料でも充分ご承知のことと思います。本日は財団法人八尾市文化財調査研究会主催の最初の文化財講座でありますので、「大阪湾沿岸の弥生文化」というテーマで、周辺を含めた弥生時代の概要をお話ししまして、市域の地理的立地条件など、その後の八尾市域の歴史を特色づける要因の一端を考えてみたいと思います。

弥生時代と呼ばれるのは、紀元前の三世紀頃から紀元後の三世紀頃まで、すなわち西暦紀元前後の数百年間と考えられております。この時代より以前は数千年以上の期間と考えられている縄文時代という時期でして、当市域におきましても、山麓線周縁部などで遺跡が確認されております。縄文時代にはなかった若干の特色をあげて、弥生時代という時期を説明しますと、まず稲作農耕をあげることができます。稲作農耕が全国的に普及し、浸透していきます。次に金属器が普及します。鉄や青銅製の金属器具の使用が顕著になります。さらに有機ガラスによるガラス製品や、絹とか麻とか「カラムシ」などを原料とした織物が普及していた時代でもあります。このような点が縄文時代とは画期づけられる特色とされています。そして、これらの事象が自然発生的なものではなく、どこか外国からの影響によって生まれたものであると考えられています。外国からの影響によってと言いましても、現代のようにフランスの製品が欲しいと思えば、一両日の

間に日本に届けられるといった状況での影響ではなく、文化を持った人・技術を持った人が日本にやって来て、このような特色的な技術・文物を普及させたということになります。渡来して来た人達が、原住民である縄文人達に、手とり足とり、いろいろ新しい文化や技術を教えたという場合もあれば、アメリカ合衆国の建国時のように、原住民であるインディアンのところへ白人がやってきて、原住民達が少数派にされてしまうというようなところもあり、こういう状況のもとに弥生社会が形成されていったと推定されております。

八尾市域でも、八尾南遺跡・山賀遺跡など水田の跡が発掘調査で確認されております。最近は全国的に弥生時代の水田の解明がすすんでおります。地域によっては、かなりの収穫を想定できるところもありますが、ほとんどの場合は、年間必要量の四分の一ほどの収穫量しか期待できない状況であったことが推計されております。こういう状態でも農耕社会と考えられているのであります。日本は四面を海に囲まれた島国であり、外敵の侵入がありません。さらに豊富な食料資源に恵まれ、しかも気候は温暖である。このような自然条件のもとで、春・夏・秋は何とか自然食にありつけるわけであります。野や山での食料、川や海や池や沼での食料などにありつけるわけですが、冬だけがちょっと困る。そのために縄文住居遺跡の若干例では、貯蔵穴という大きな穴を掘りまして、その中に椎とかドングリとか栗とか、秋の収穫を貯えていたのが、炭化した状態で遺存しており、これらが冬の間の保存食であったらしいことを示しております。そういった

目で見ますと、弥生時代と言いましても、春・夏・秋は縄文時代とほとんど変わらない生活を営み、秋に収穫のあったお米、これで冬をしのぐ。椎とかドングリに代わるものとして、まず稲が珍重されてくる。こういう状態から社会が発展をしていく。当然のことですが、収穫の多いところではゆとりができる。ゆとりのある所、ゆとりのない所、こういった違いから徐々に経済的な基盤をもった階級社会といったものが、この時代に発生する。この稲につきましては、中国からやってきたのか、朝鮮半島からやって来たのか、弥生人のルーツとも関わり合いがありますので、その源流の解明に関心が強いわけですが、現状では根源地を特定することは難しい状況です。最近ではテレビなどでいろいろと情報を提供してくれますので、稲のルーツに関心の深い方も多いと思いますし、現実に、中国の江南や雲南地域、台湾の台南地域、タイ国北部地域などの調査が進んでおり、各専門分野の研究者達が、稲の出現はどこであろうか、どういう経路で入ってきたのであろうか、などの検討がなされておりますが、可能性は種々推定されますけれども、まだまだ特定できるという段階ではありません。また、ジャポニカ種だけしか入っておりませんので、日本の風土に合致した稲種だけを移入した事情についても検討がなされております。世界の各地には、人間の生活の智恵によって生まれた種々の文化現象があります。その中には、日本にみられる現象と類似したものもみられます。しかし、一つや二つの習慣や建造物の類似をもって、ただちに日本人のルーツに結びつけることは非常に危険なことでありまして、なお参考の域を出な

い現象と考える必要がありましょう。縄文人の主体性も無視してはいけません。

しからば、なぜ、数千年以上にわたった縄文時代に、徐々に継続的に、弥生文化に該当するような新文明が日本の各地に移入されずに、紀元前の三世紀の頃に突如として出現し、社会の大変革がおこるのであろうか。これはやはり、外国の政治情勢・社会情勢の変化とは無関係ではないと考えられます。日本は島国ですが、外国は陸続きの国々であります。日常茶飯事のように隣国との友好・対立・戦闘というようなことが繰り返されております。B.C.二二一年の秦帝国の中国統一、そしてB.C.二〇二年の前漢の成立など、大陸の政変の余波が周辺の国々に及んだことは間違いありません。例えば前漢の武帝がB.C.一〇八年に朝鮮半島に侵入し、楽浪郡以下の四郡を設置する。これは東アジアの世界に非常に大きな影響を与えることになります。また漢帝国の膨張によって江南の農耕民が東シナ海方面へハジキ出されてしまうというような現象もあったことと推測されます。日本の地に弥生時代が出現する背景には大陸の政変といった事情が引き金的な要因をなしていることは、一つの大きな要素として考えられることであります。しかし、それが全てでないことは、弥生文化を構成する要素が個別的で、一ルートではないことからもうかがえます。

例えば、柏原市大県の高尾山からは多鈕細文鏡（写真1）（細線鋸歯文鏡とか幾何学文様文鏡とか呼ばれている）が単独出土しています。この鏡は日本では六面発見されていますが、佐賀県と山口県で

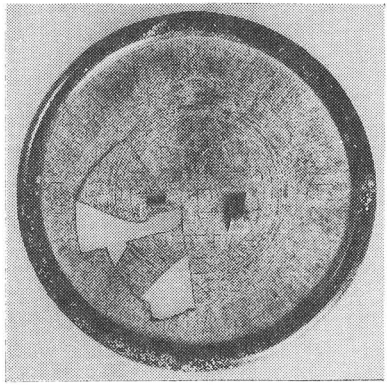


写真１　柏原市大県出土の多鈕細文鏡
（「八尾市史」より）

は細形銅剣と同伴し、奈良県では銅鐸と同伴、長野県では玉類・鉄器類と同伴しています。この多鈕細文鏡はシベリアから中国東北部を中心に分布する鏡ですが、朝鮮半島にもかなりの量で出土例のある遺物であります。従って、この多鈕細文鏡だけを取り上げますと、日本出土の鏡は朝鮮半島を経由して移入されたと考えてよいわけであります。しかし、弥生時代の鏡には、前漢時代に造られた前漢鏡・漢中期鏡・後漢鏡、さらに魏・呉・蜀の三国が鼎立した三国時代の三国鏡などがあります。ところがこれらの鏡は朝鮮半島には非常に少のうございます。私も朝鮮半島には何回も調査に参っておりますが、日本の出土例とは比較にならない少量でございます。これをどのように考えたらよいのであろうか。前漢鏡以後は、朝鮮半島で鏡を所持していた有力な人達が次々と鏡を抱えて日本の地に渡来してしまったのであろうか。朝鮮半島経由以外のルートがあったのであろうか。多鈕細文鏡の移入のように単純に考えてはならない問題が他の形式の鏡からは考えられるわけです。

日本に移入された前漢鏡は弥生時代の前期・中期という古い時期の北九州地域に密集して検出されています。そのほとんどは甕棺（かめかん）という形式の墳墓副葬品として発見されるのですが、実用品

である青銅剣と一緒に副葬されております。ところが後漢鏡になると、青銅剣は副葬されず、鏡だけが墳墓に副葬されています。銅剣は実用品・仿製品を含めて墳墓に持ち込まなくなり、村落・集落共同体のひとつの儀器に変わって参ります。どうやら弥生中期から後期の時期に、北九州では銅剣の用途変更がおこったらしい。

一方、近畿地方では弥生時代を通じて鏡はほとんど発見されない。鏡の断片を磨いて紐穴を穿ち、ペンダントのようにして使用されたらしい鏡片が西日本各地と同様に若干出土している程度であり、数量的にも数種類の鏡片という貧弱さである。このように漢系鏡は北九州地域に大量に移入されているが、朝鮮半島や瀬戸内・大阪湾沿岸にはほとんど移入されていないとしか考えられない出土状況であります。従って、文物はすべて朝鮮半島経由と判断するわけには参らない面がございます。

また、弥生終末期から古墳時代の始めにかけて、すなわち三世紀から四世紀の時期に小形仿製鏡と呼ばれる小さな鏡が西日本に分布します。直径三・八センチメートルから八センチメートルぐらいまでの粗製鏡です。鏡の文様は内行花文鏡という形式のものが大半ですが、他に綾杉文鏡・鋸歯文鏡・渦文鏡・八乳鏡・無文鏡などがあり、大阪湾沿岸では重圏文鏡（図1）がみられます。この小形仿製鏡の古里を追求すると、朝鮮半島南部の韓国慶尚北道永川琴湖面魚隠洞遺跡をマークすることができます。ここからは一六面の小形銅鏡が出土していますが、そのうちの三面は前漢舶載

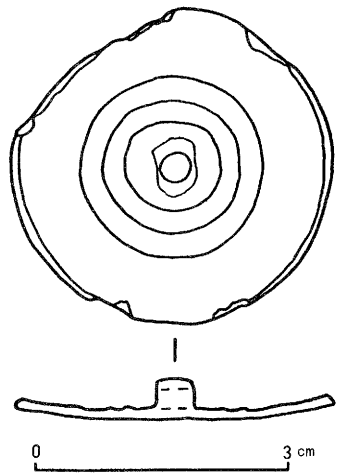


図1　尼崎市下坂部遺跡出土の重圏素文鏡

鏡であり、他は仿製の渦文鏡一面・内行花文鏡一面・不明鏡一面である。どうやら漢系の人々が琴湖江南岸の魚隠洞に移動し、そこで携行してきた小形鏡を仿製し、その複製品が北九州を中心に西日本の各地に伝えられ、亦仿製されたということが推測されています。現状では、この鏡は中国で作られ、日本に移入される原動力は朝鮮半島南部にあった。そして、この小型仿製鏡の段階で、弥生時代の近畿地方でも鏡の仿製がみられるということが言えると思います。

鏡だけを取り上げますと、弥生時代の北九州では芸術品といえる立派な漢系鏡を大量に入手しているが、近畿地方では弥生終末期になって小型仿製鏡という粗製鏡を少量分布させているということになります。そうであれば、弥生時代は金属器、すなわち青銅器・鉄器の時代といわれるが、金属器は鉄器を含めて全て北九州に集中し、近畿地方には比較にならない位の少量しか入っていないのであろうか。青銅そのものの量からみると、そうともいえない面があります。それは近畿の弥生時代を代表する青銅器の銅鐸・銅戈の原料の量であります。八尾市域でも恩智垣内山、恩智都塚山・亀井遺跡から銅鐸が発見されております。銅鐸は中国の偏鐘という楽器を祖型とす

ると言われていますが、日本では大型化し、用途も確定されるまでには至っておりません。現在四五〇個ほど発見されていますが、大半が近畿地方に集中しています。おそらく、現在の発見量の倍以上が製作されていると思われますので、北九州の銅剣や銅矛と比較しても、近畿に入っていた銅の量という点では対等か、それ以上と考えてよいと思います。

弥生時代は縄文時代と同じく、土器にせよ、石器にせよ、あらゆる道具類・器具類は自給自足で自分で作るのが原則です。玉類でも原石さえ手に入れば集落内で自分で作ります。しかし、銅鐸というような青銅器は、そうは参りません。原料の銅・錫・鉛の入手と鋳造設備と技術者が必要となります。土器や石器のように、どこの村でも誰でも造れるものではありません。原料と技術者を管理下においた強力な権力者の存在が考えられます。大阪湾沿岸・近畿地方に鋳造工房の跡や鋳型の発見例がみられるのは、大型の銅鐸が主として近畿地方で造られ、その配布管理者が存在したことを推測させます。近くの東大阪市からも鋳型が検出されています。しかし、銅鐸は近畿地方だけの特色ある青銅器ではなくて、北九州からも小形銅鐸やその鋳型が検出されています。中国で作られた鏡、朝鮮半島経由で移入された剣や矛などの青銅器は、日本に波及すると大型化して仿製される特色をもっていますが、初源的な仿製は北九州から出発した可能性が強い状況です。しかし、外来文化は全て北九州が窓口で、西から東へ波及したとは断言できない面があり、海外との交流は日本海側をはじめ、種々の水上の道があり、北九州が最も主要な地域であっ

たということになると思います。

一方、近畿地方の弥生時代を代表する青銅器である銅鐸は、弥生時代の終末期である三世紀頃になりますと、急に姿を消してしまいます。

銅鐸は発掘調査で検出された例が非常に少なく、大半は偶然発見の状況で検出されています。そのため、出土例や遺構例を手がかりとして、銅鐸は農耕・水などに関係のある儀器であり、平常は地霊を祭るために土中に埋めておき、祭器として使用の時に、地中から取り出し、祭祀が終れば再び地中に戻していたが、ある時期以降は再び取り出されることはなかったとか、周辺各地の集落が所持していた銅鐸を一ヶ所に集めて埋納したとか、種々の考察がなされています。しかし、若干例ですが掘り方が判明している場合、埋納された時から銅鐸の一部が地上に露出していたと考えられる浅い土坑の場合、砕破されて検出される場合、破片の断片だけが検出される場合、一個のみ埋納の場合、複数以上で埋納の場合などがあり、とるもの取りあえず隠したようにも考えられる例もあります。どうやら三世紀の終り頃になると、社会状勢・政治情勢の変化が起り、銅鐸祭祀集団に属していると危険であるという状況が発生するようなことがあり、銅鐸を宝器・儀器とする社会体制・宗教体制・政治体制が終わりを告げたとも考えられます。北九州の青銅器も同じ頃に姿を消していきます。近畿だけではなく、全国的な現象でもあるのです。又、銅鐸の鋳型が北九州の各地で検出されていますが、銅剣(図2)の鋳型も大阪湾沿岸の尼崎市田能遺跡で出土し

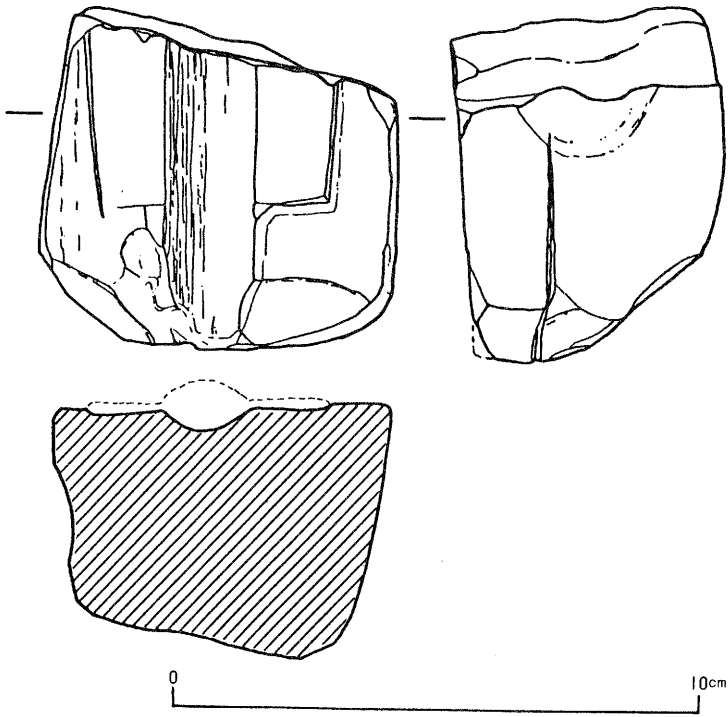


図2　尼崎市田能遺跡出土の銅剣鋳型

ております。北九州を中心に出土する中細形銅剣（図3）の分類形式の古いものですが、弥生中期初頭の遺構から出土しました。考古学は実証の学であり、発掘調査の生命は出土状況の確認でありますが、この鋳型は弥生中期初頭の遺物包含層から出土し、鋳型としての用途を失った後も、砥石として再使用された痕跡を残しておりました。従って中細形銅剣の鋳造地は北九州だけではなく大阪湾沿岸にもあったことが考えられ、青銅器

の波及とともに各地に有力者による鋳造工房が出現したとも考えられるわけです。これは同一祭祀集団ともいえるわけです。しかし、この銅剣を模して石で造った有樋式石剣(図4)は、播磨の揖保川から河内にかけての地域、すなわち播磨・但馬・丹後・丹波・摂津・河内の地域からしか検出されていません。銅剣を石剣に置きかえて儀器として使用する集団なり習慣が、一部の地域にのみ存在したということになります。鉄剣を模した石剣は全国で製作され、実用されていますので、

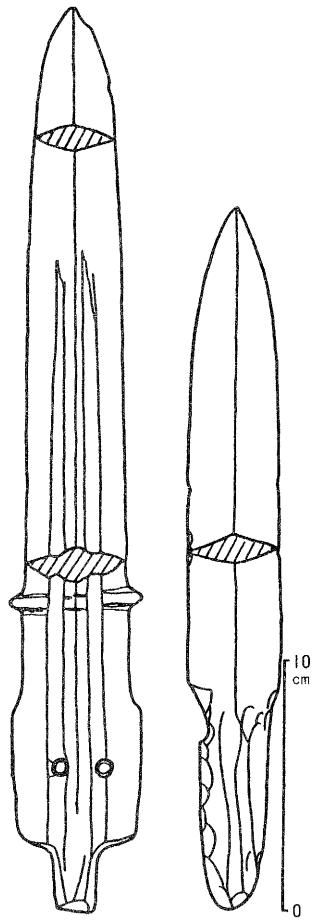


図4　有樋式石剣(左)と鉄剣型石剣(右)

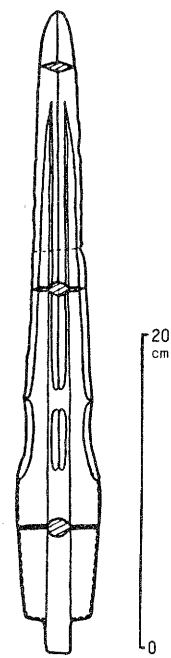


図3　古津路出土3号銅剣(「桜ヶ丘銅鐸・銅戈」より)

有樋式石剣の分布は注目されるのです。

弥生社会の終末を示す、弥生時代の代表的な青銅器の状況を見て参りましたが、大阪湾沿岸の顕著な弥生遺跡に高地性遺跡と呼ばれる特殊な遺跡があります。

弥生時代は低湿地農耕の社会でありますが、山の頂上や山腹など、農耕地に遠く、単なる丘陵程度ではない地域に集落が見られるのです。当然、見張り台的な要素、のろし台的な要素、城塞的な要素など軍事的要素が強い集落遺跡ということになります。山の民の遺跡とか、避災の集落とかいったものではなさそうです。完掘して遺跡の全貌を明らかにしたのが芦屋市会下山遺跡であります。一九五〇年代後半から六〇年代後半にかけては、低地大集落跡としての尼崎市田能遺跡とともに、大阪湾沿岸の弥生遺跡の状況を知る重大な手掛りとなっていたのが、この二大遺跡であります。

会下山遺跡は標高二〇〇メートルの会下山山頂部幅数メートルの尾根上に遺存する遺跡で、弥生中期と後期の時期に集落として使用されています。最高所に露天の祭祀場、次に石組と祭祀用小住居を付設した祭祀場、次に屋内に炉をもつ首長住居、そして柵址、半竪穴半平地式を含む一般住居群、屋外炊さん場、倉庫址、泉址、廃棄溝址、墓域（土坑墓）などの遺構が尾根及び支脈上に遺存し、多量の土器・石器をはじめ、玉類・鉄器・銅鏃などの遺物が出土しました。農耕社会でありながら非生産的な集落遺跡でありました。北方は六甲山頂に通じ、東・西・南は見晴し（図5）

よく、大阪湾と平野が一望できる立地で、軍事集落の要件を満たしておりました。出土遺物に農耕具が無く、大型鉄鏃や漢式三翼鏃(図6)などが見られます。特に漢式三翼鏃は全国的にも出土例が無く、外国からの持込み品であり、単なる移入か、打込んだ人が上陸して来たかは問題のあるところですが、周辺を合わせ、二本が現在知られています。どうやら弥生後期の頃には大阪湾沿岸を含む各地に国際的緊張といった状況が発生し、その結果、各地に軍事的集落である高地性遺跡が出現した可能性もあります。このような遺跡の類型から、時期的には魏志倭人伝や後漢書東夷伝に出てくる「倭国大乱」の記事と結びつけ、その戦乱の遺跡とみる考え方もあります。大阪湾沿

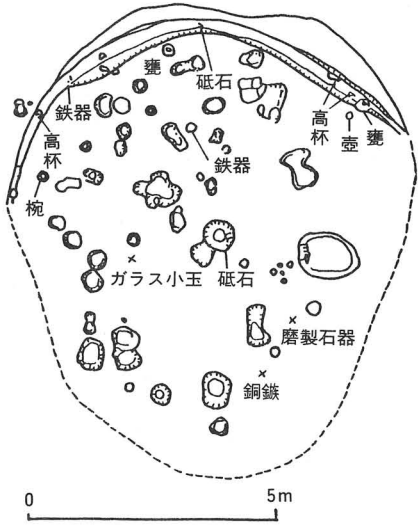


図5　会下山遺跡・首長住居址

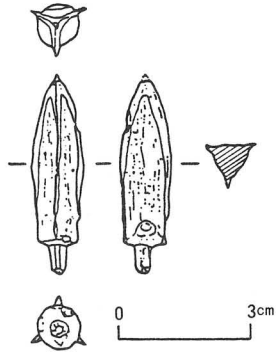
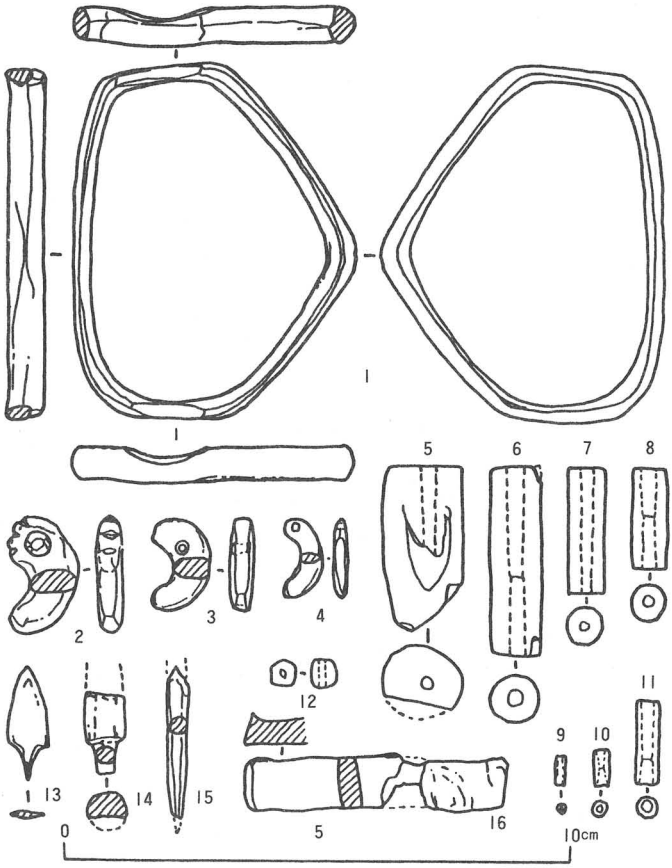


図6　会下山遺跡出土の漢式三翼鏃

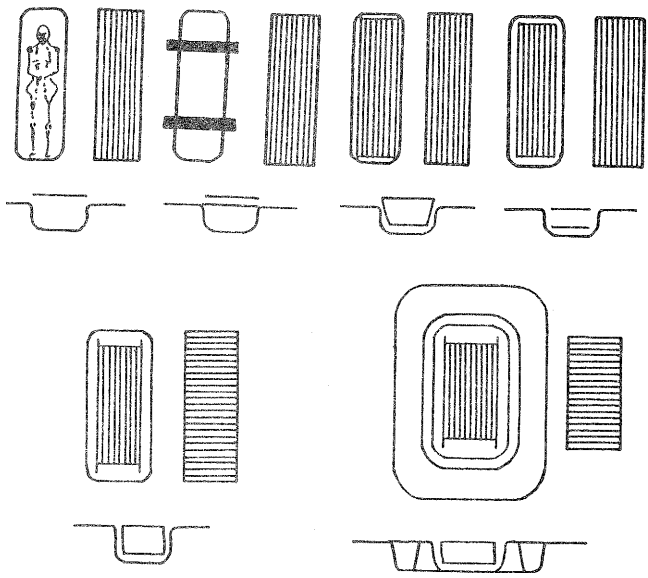
岸の弥生時代を考える上では、大阪湾海上支配権を含めて、弥生系高地性遺跡を度外視することはできないと思います。瀬戸内海航路の終着駅が大阪湾であることも、重要な立地条件であります。大阪湾海上支配権の争奪は何時の時代でも重要な戦略要素であったと思われ、弥生時代にもそのようなことがあったことは推測してよいと思います。中国における魏・呉・蜀三国の鼎立といった時代、魏・呉の代理戦争であったかどうかはわかりませんが、そういう国際情勢のもとに高地性遺跡が出現した可能性は高いと思います。

また、尼崎の田能遺跡(図7)では、近畿ではじめての弥生木棺と人骨を方形周溝墓内で検出し、近畿の弥生墓制と近畿弥生人についての初見資料を提供しました。特に成人は高野槙の組合式箱式木棺をはじめ、各種の木棺・土壙墓に伸展葬で葬り、男子は直立、女子は胸で手を組む風習をもち、乳幼児は覆口式の甕棺(図9)・壺棺墓であることが判明しました。人骨からは、足が長い人達であることもわかり、調査時には「ナガスネヒコ」を念頭に想起したものです。方形周溝墓には、覆屋があったことを推測させる、溝内に建築用材が散乱するものがありました。また、大型棺には多量の玉や釧をもつ支配者の埋葬がみられました。集落も土間生活ではなく、床生活の高床式住居が主であり、生活様式にも注目させられるものがありました。しかし、弥生後期にはこの大集落は終焉を迎えております。大阪湾沿岸の弥生時代は、青銅器・集落址・高地性遺跡など、その特徴的なものを取り上げてみると、弥生終末期に一応の終焉を示しております。社会は新しい時代に



1　白銅釧　　2～4　硬玉勾玉　　5～12　碧玉管玉
13・14　銅鏃　　15　骨鏃

図7　田能遺跡出土遺物

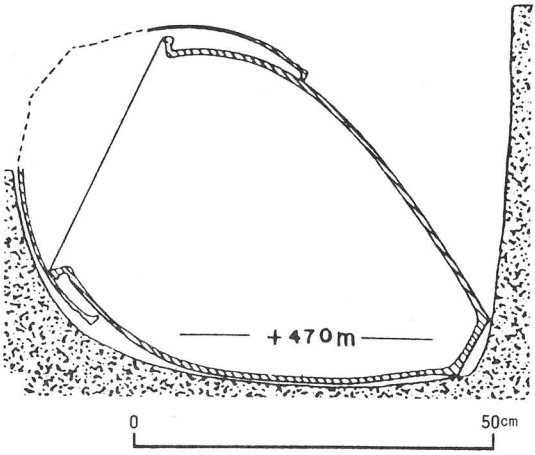


① 木蓋土坑墓　② 有槨木蓋土坑墓
③ 箱式木棺墓　④ 側板なしの箱式木棺墓
⑤ 組合式箱式木棺墓　⑥ 二重掘形組合箱式木棺墓

図8　田能遺跡の弥生墓棺模式図

移行していったことが、土器などの面からも推測されます。そして、古墳時代と呼ばれる時代区分に入ることになります。このような時代推移の胎動期のドラマが八尾市域を含めた大阪湾沿岸の各地で展開されたことと考えられます。

河内の地域は、とくに中河内地域の考古学資料の整備によって、河内湾、河内湖の時代を中心に、日本歴史の中心舞台としての立地条件を裏付ける考証が可能であり、その結果、弥生社



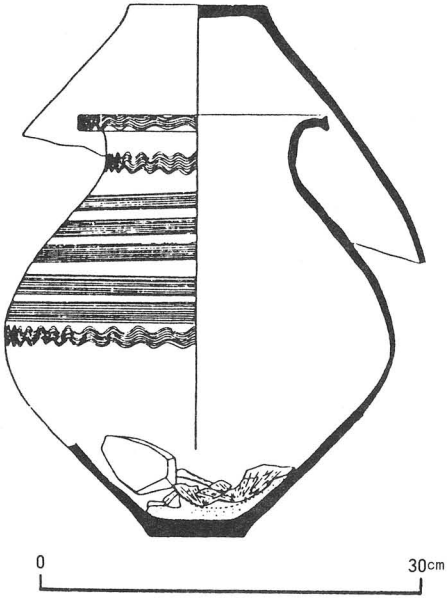


図9　田能遺跡出土の
甕棺（上）と
壺棺（下）

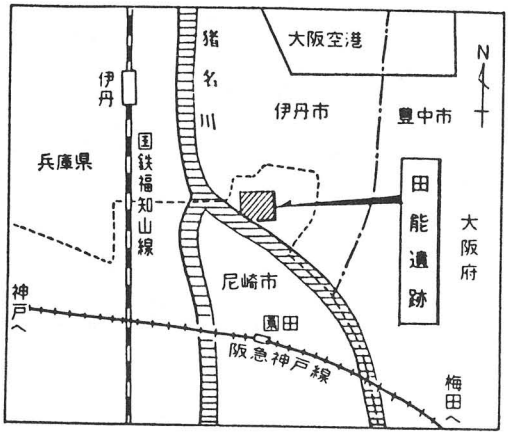


図10　田能周辺の略地図

会の源流・社会構造・実態が鮮明にされる遺跡の宝庫であると思います。八尾市文化財調査研究会の実証による画期的な成果を期待したいと思います。本日は田能遺跡の方形周溝墓と弥生人骨を若干スライドで紹介し、ナガスネヒコと記される河内人を想い起していただきたいと考えます。

① 田能遺跡（図10）は猪名川の北岸に当り、西側は豊島郡と河辺郡の郡境が猪名川となっているため、地貌は古い様相を示しております。猪名川をはさんで遺跡の南側は園田競馬場、遺跡の北西は伊丹市口酒井遺跡、東は勝部遺跡に接しています。現在は北東部に伊丹空港があります。市域では伊丹市・豊中市・尼崎市の境界域になり、ここに伊丹・西宮・尼崎三市共同の工業用水源地の造成が通産省補助金を得て始められ、その過程で大遺跡が検出されることになりました。（写真2）

② 地形が西から東へ傾斜している地区があり、この地域では流出堆積した土器が厚さ二メートル程、完形品を中心にぎっしりとつまっていましたが、工事を急ぐ行政機関により、バリバリと音をたててブルドーザーに破壊されていました。現場に立ち入り、やっと遺構を図にとると亦ブルドーザーによって瞬時に破壊されるという現在では考えられもしない状況で緊急調査に入ったわけです。保存か開発かという大問題を抱え、死力を尽しての交渉の結果、第四調査区の全面調査が認められ、保存の方向への第一歩を踏み出すことになりました。（写真3・4）

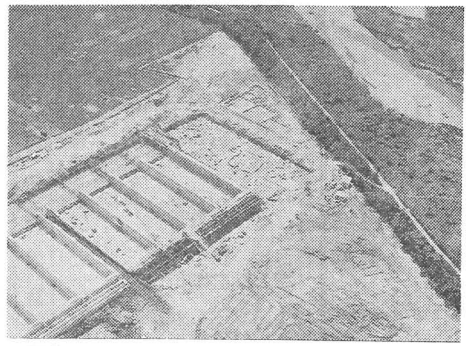


写真2

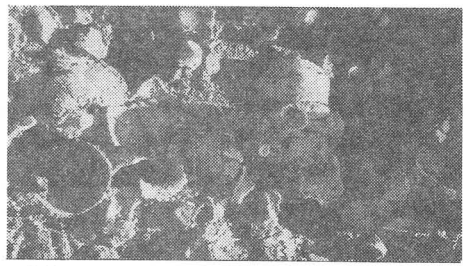


写真3

③ 視覚に訴えるより方法のない当時でしたが、近畿地方で最初の方形周溝墓と木棺を検出しました。これは一辺十メートル、溝の幅一メートル・溝の深さ一メートルのものですが、中央部に木棺があり、覆屋があったらしく、溝内に長さ三メートルの建築用材多量や桜の皮を捲いた木釘

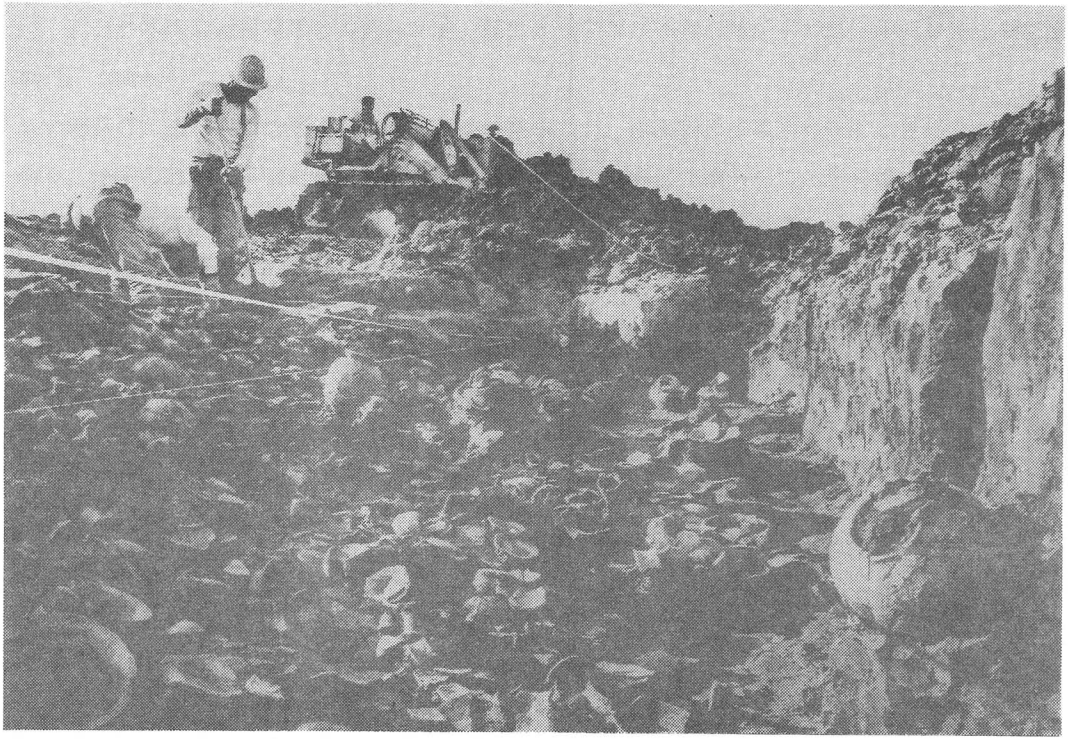


写真 4

や砧や弓などが遺存していました。（写真5）

④　集落内には排水路が縦横に走っており、河口付近の単なる微高地に生活の場を築いたのではなく、集落の周りには大土木工事をした大溝があり、集落内も盛土をして排水路を通すなど、色々と低湿の河辺に住むための工夫の跡がみられました。高床住居の柱孔も生活の知恵かも分りません。（写真6）

⑤　沢山の柱孔は高床住居の柱孔ですが、円形竪穴住居址も若干ありました。弥生中期の生活面

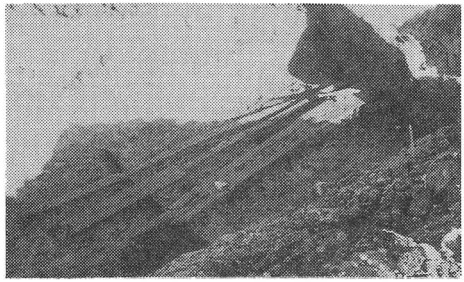


写真5

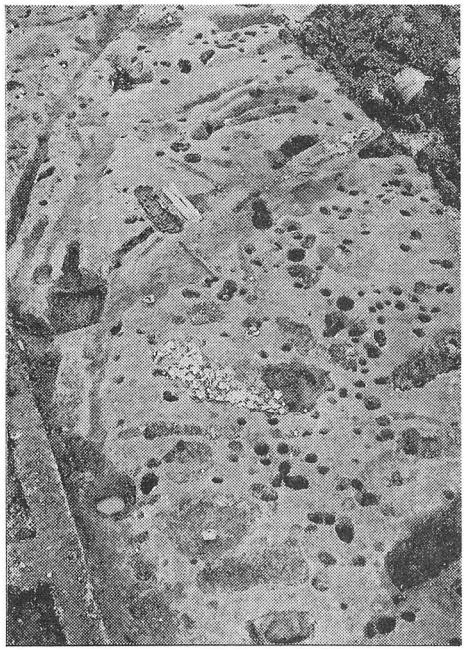


写真6

が弥生後期には墓域となり、それまでは乳幼児が集落内に葬られていたのですが、支配者とその家族のみが方形周溝墓や土坑墓や木棺墓を営んだと考えられます。住民全部が葬られた墓域とは考えられない状況でした。

調査終了後、国の史跡となり盛土保存されている第四調査区の全景で、墓域の中心でもあります。この調査区で方形周溝墓三基、木棺墓・木蓋土坑墓・壺棺・甕棺墓などが集中して検出されました。（写真7）

⑥　有桟式の木蓋土坑墓です。土坑を掘り、両端に桟を渡して、その上に蓋板を置く形式で、内部には抜歯痕の無い伸展男性人骨が完存していました。調査員全員が弥生人骨や木棺の発掘経験を持っていませんので、団長の仕事ということになり、この第一号棺は私が掘り出しました。人

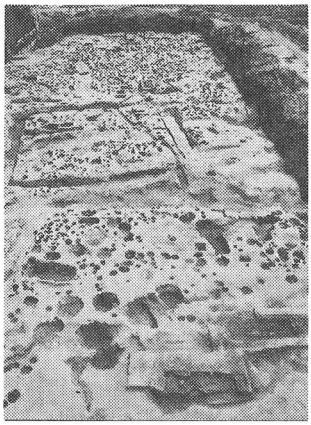


写真7

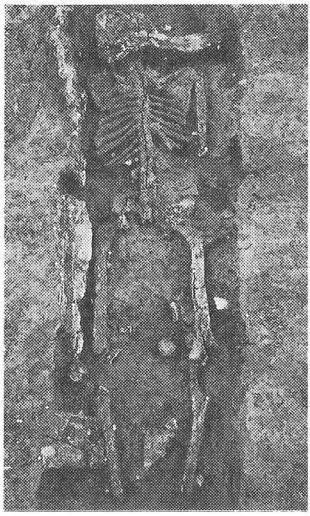


写真8

骨は真白な状況でしたが、空気に触れると、みるみる灰色に変色し、粉末化して土に戻っていきました。辛うじて全身像を露出したものです。（写真8）

⑦　抜歯痕の無い歯だけが、高野槙の棺材とともに遺存した例です。殆んどの棺には人骨が完存していましたが、このようなのは珍らしい例です。（写真9）

⑧　木蓋土坑墓ですが、女子は胸の上で手を組んでいます。胴が短かくて足が非常に長いのが田能人の特色ともいえます。（写真10）

⑨　これは小口・側板・蓋板・底板の全部が遺存していて、一応、木棺の図示ができる形式です

写真9

写真10

が、現在の木棺とほぼ同じです。高野槙ですが、かなり腐蝕しています。遺体がねじれている状況を呈していますが、これは、墓棺を此所で設定をして、そのあとで側まで運んで来た遺体を納入したらしく、その際に遺体がねじれた状況です。棺に納めて此所まで運んで来たのではなさそうです。（写真11）

⑩　木蓋土坑墓の例ですが、墓坑を掘って、遺体を納めようとしたところ、墓坑の長さが短かすぎたため、遺体の腰を曲げるような状態で押し込んだ。このためモンキーダンスを踊っているような姿になっている。女性ですので手は胸で組んでいます。（写真12）

⑪　遺体の上半身が失われていますが、舟形木棺の一例です。（写真13）

⑫　大型棺のため、底板は縦板を並べ、小口や側板は裂いた板材で組み、蓋板は短い横板を何枚

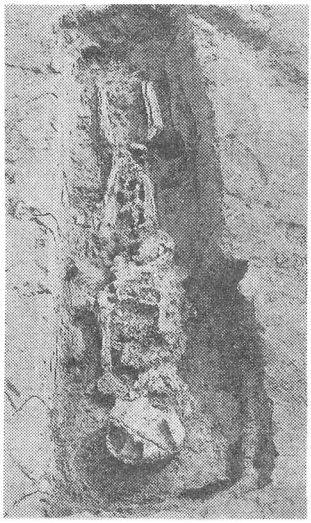


写真11

写真12

も並べて用いております。底板は棺全体より一廻り大きく敷いてあります。（写真14）

⑬　どうも方形周溝墓の溝を造成した際に既設の封土や木棺があることを知らずに破壊してしまい、やむを得ず溝内に掘り込まれて遺存した状況で、溝内に木棺を埋納した状況ではありません。（写真15）

⑭　二重掘り方をもった大型木棺で、内部には朱が敷いてあり、この墓域の中でも特別な地位にあった人の墳墓といえます。北向きに二基が並んでいました。

棺内は朱がつめてあり人骨も赤く染っていました。八〇〇余個の碧玉製管玉を首に捲いたまま納棺されていました。したがって玉類は平素身につけていたもので、副葬品ではありません。北九州の弥生墓棺では、鏡・剣・玉などの副葬品がみられますが、近畿では支配者の墓棺でも副葬品はみられません。慣習の違いがあったようです。（写真16）

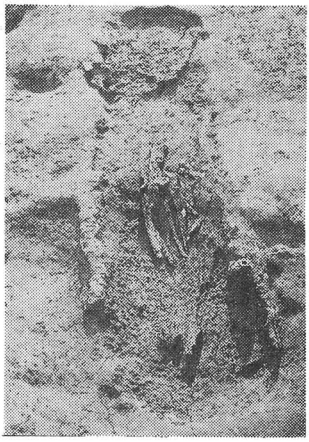


写真13

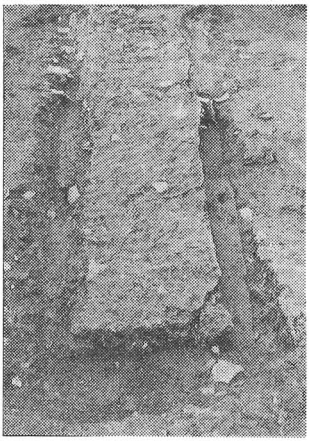


写真14

⑮　八〇〇余個の玉が首に捲かれていたため、人骨の背部からもつながった状況で検出できました。発見当時は日本発見の弥生時代の玉類全部の量よりも多いと注目され、邪馬台国の女王卑弥呼の墓だと云った研究者もありますが人骨は男性でした。（写真17）

⑯　玉を復原的につなぐとこのような状況になります。（写真18）

⑰　この棺も、特別な人の大形棺ですが、棺材がしっかりしていて、西の方から水が棺内に入り込み、内部の遺体を東の方に押しやっているようです。棺はしっかりしていたのですが、浸入した水のため人骨が移動した例です。白銅製の腕輪（釧）をしていましたが、出土した際は銀色に輝いており、銀製と考えられましたが、時間がたつに従って灰色から黒色に変色してまいりました。（写真19）

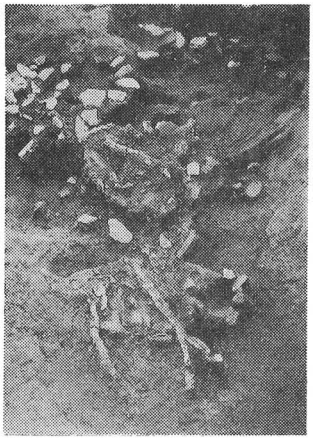


写真15

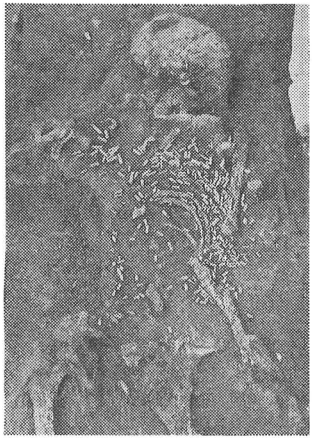


写真16

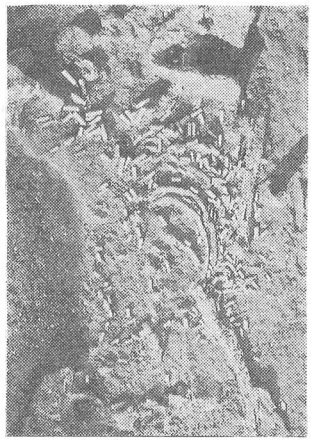


写真17

写真19

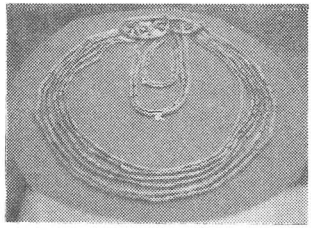


写真18

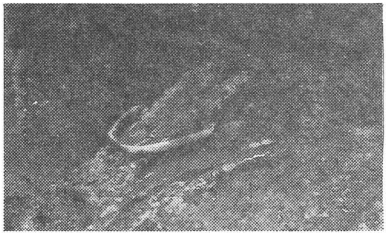


写真20

⑱ 他の木棺の二倍程の大きさの墓棺をもった二基の墓は集落内でも特別の地位にあった人ですが、これは釧の検出状況を角度をかえて示してみました。第四調査区の西南隅で検出されました。（写真20）

⑲ 銅鏃と鹿角製の骨鏃です。田能からは鹿・猪・鳥・魚・鯨などの骨が出土しています。（写真21）

⑳ 乳幼児の墓は壺棺か甕棺でして、何れも遺体を朱で捲き、棺内に納めて、覆口式の蓋をしています。蓋

はこのように大形鉢を用いるのもあります。これは甕棺の断面を示したものです。（写真22）

田能遺跡は現在では国史跡として盛土保存され、遺構を模式的に復原し、参考のために復原住居や復原倉庫を建て、十万点余の遺物や木棺は田能資料館に保管展示されています。毎年地元の方々が春と秋に慰霊祭をして下さり、私も毎回参上してお参りしておりますが、地元の方々の遺跡に対する関心の深さと先住者に対する礼儀の厚さに感銘を覚えております。当時においては日本最大の規模の発掘例でしたが、調査を担当し得たのは財源をもつ尼崎市域であり、国の指示で奈良国立文化財研究所が全力をあげて応援して下さり、末永雅雄先生はじめ各研究者が手弁当で協力して下さったおかげだと感謝しています。

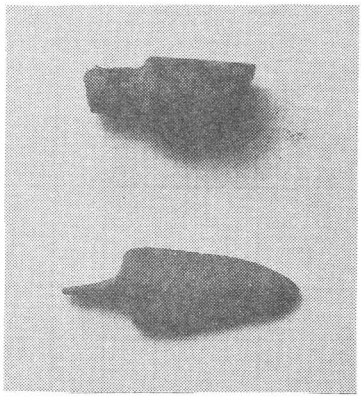


写真21

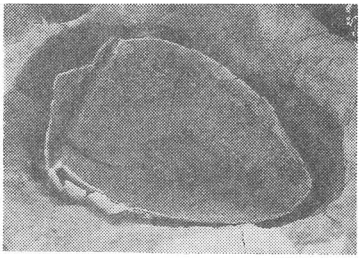


写真22

昭和五八年五月九日
於　市立教育センター

環山楼と江戸時代の建築物

近畿大学理工学部助教授

櫻井敏雄

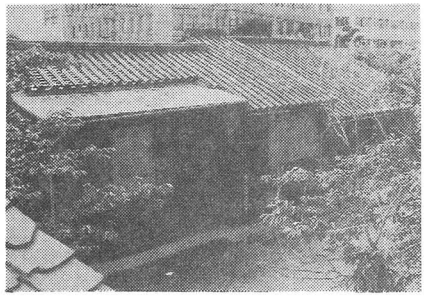


写真23　修理前

櫻井でございます。本日は座ってお話を申し上げることになりましたので、どうかお楽な姿勢でお聞きいただければと存じます。

「環山楼と江戸時代の建築物」という題でお話を申し上げますが、最初にそのアウトラインについて申し上げることにいたします。今、座っております環山楼（写真23・24）の建物は、今回解体修理を行いまして、このようにきれいに整備されましたが、実は保存すべきかどうか問題となった建物でした。環山楼についてお話すべき第一のことは、この解体修理によって判明した事実や、その復原調査の結果、建立年代、また建物の特質などについてでありますが、第二にはこうした江戸時代の、地域を代表する建築をとりまく情況についてお話をしておく必要があろうかと存じます。三番目には、こうした私達の周辺に現在も残されている江戸時代の建築―主として社寺建築や民家・町並について、いくつかの観点からお話をしてみたいと存じます。

最初に今回の解体修理と復原・整備工事についてお話することにいたしましょう。

環山楼は江戸時代に八尾寺内町の豪商石田善右衛門利清が建てた私塾です。石田家は近江佐和山城主石田三成の血筋をひくと伝えており、近江石田村から六兵衛三利なる人物が出て秀吉に仕

え五千石を賜わったといわれています。（『石田家之世系』）関ヶ原の役後は野に下り、河内若江郡八尾宮八幡宮のあたりに蟄居させられ、やがて浪速高麗橋小山市右衛門の娘をめとり、長男弥右衛門利村と次男新兵衛利正をもうけました。

慶長十八年（一六一三）に六兵衛三利が没すると、弥右衛門利村は小山家の養子となっていたので、新兵衛利正が後を継ぎ、八尾寺内の西北に田宅を買って移り住み、油屋と肥料商を始めたと言われています。利正はこうして父方の石田姓を名乗り、母方の「小山屋」を屋号として初代となりました。

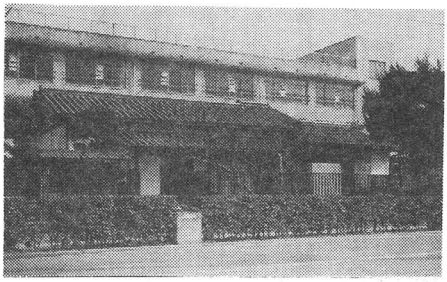


写真24　現在

利正が元禄六年（一六九三）に亡くなると、二代右衛門利為（寛文六年没）、三代善右衛門利範（宝永六年没）、四代善右衛門利次（享保四年没）が家を継ぎ、そして五代目が環山楼をつくった善右衛門利清でした。

利清は家業を継ぐかたわら、幼少の頃から読書に親しみ、長じて好学、博識の人物となったと言われています。

当時は大坂の町人学問所として創立されていた懐徳堂をはじめ、八尾久宝寺に麟角堂、平野郷に含翠堂などの学塾が開かれ、学芸、教育の盛んなこともあって利清も碩学名儒と交友する機会をもっ

ていたようです。

たまたま享保十二年（一七二七）に伊藤東涯が平野の含翠堂に来遊し講義をした時に、八尾寺内村の扇子屋甚三郎らに招かれて、利清の別荘で講席を開いたといいます。この時に麴屋伝兵衛、堺屋吉右衛門、松下一郎右衛門、小山善七、同四郎兵衛、塩屋伝右衛門、また利清の叔父利長、弟の孝鳳、従弟の可承、利穹、飯田通吉、嶝口孤島らも同席したそうです。『初度含翠堂孝』によりますと、「…久宝寺村をすぎ八尾村八村あり、寺内村にいたる。某氏の別荘邑の東南にあり、亭あり上に山楼あり、東南にむかふ松月亭と云い、主人餌を弁、何も催興、この所にて河州東南の山川ことごとく目中にあり」とありまして、この文中の某氏の別荘というのが利清の別荘を指したものと思われます。

これを機縁にして私塾として使用するに至ったらしく、享保十五年（一七三〇）に再度、東涯がここを訪れた時に、生駒・高安・二上・金剛の山並を目中にするところから、「環山楼」と名づけたことがわかります。（『環山楼記』）以上が、環山楼が成立するに至った経過です。

以来、河内周辺の商家や農家の子弟や郷民もその名声と学風をしたって環山楼で学ぶ者が増え、宝暦十四年（一七六四）五月、利清が五九才で亡くなった後も、通古（岩松斎）、可承（后発）、孝鳳（汶州）、元為（音々）などが輩出して私塾を運営いたしました。

この建物は先程ご紹介がございました様に、何度か移転をしております。ですからかなりの修

理を受けておりましたし、又、痛んでもおりました。この建物を移転するについては、建物がばらばらにならないように、鉄筋の様なものを柱間の上下にずっと入れて固定しまして、柱を移してきたようでございます。ですから今でこそ、現われておりませんが、この壁の中には鉄筋を通すための小さな穴があけられ、柱をはじめ部材がだいぶ痛んでいました。古材はなるべく残したかったので、とにかくその部材の修理からまず始める。すなわち、この建物を修理する場合には、その構造主体であります柱を、まず最初根継ぎをいたしまして、古材の繕いをいたしましてから組み直して、現在見る様な形へと作り上げて来たのです。このあたりの床柱、柱を見ましても下の方は全部根継ぎをされております。この様に使用できる材はできるだけ再利用しながら、構造的な欠陥が生じないような形で取替材を採用するというのを基本といたしました。そういうわけで材の繕いから始めまして、その次には、この建物はかなり大きく修復をされていたものですから、その原形について考える必要があり、当初から、この修理前の様な形であったかどうかというような事を調べなければなりません。それにはどうしたかと申しますと、例えば、柱には必ず、壁の中には壁を固定するための小舞という部材がございます。もと壁であった個所にはその小舞の痕が残っていますし、勿論あるものは一時期、壁とした場合もありますので、それを判別しなければなりません。また垂木にしても打ち替えられていないかどうか、釘跡の一本一本をずっと調べていきます。こうして各柱間の対向の痕跡を調べて、もと壁であったとか、開口部であった

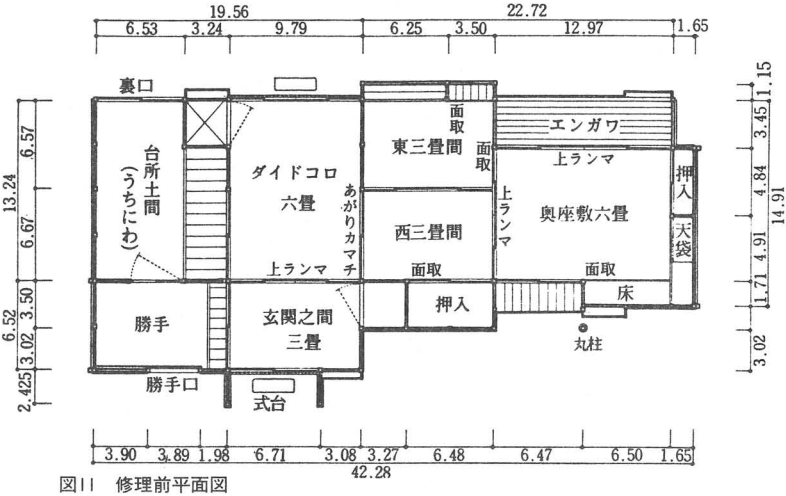


図11　修理前平面図

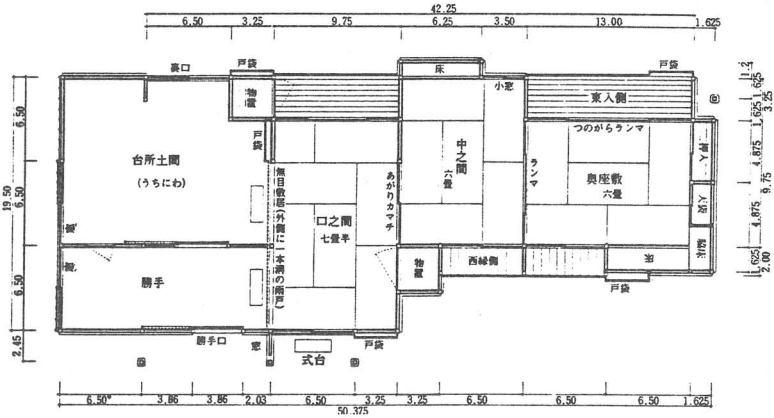


図12　竣工平面図

とかを決定し、また、部材が取り代わっている場合には、推定して間取りを決定いたします。こうして痕跡を全部調査いたしまして、釘の一本に至るまで全部調べました。又、いつ頃修理を受けたものかを判断する必要があります。釘跡と申しましても、古いものはご承知の様に角釘（和釘）ですね。何度か移転をしておりますので、そういうところの修理は、今の丸釘で、残っている穴が丸いわけです。この釘は古い、これは新しい、それを全部、今度は平面図の上に、その調査結果をおとします。それからまた、材なんかを見た場合に風食をしている。内側にある柱にもかかわらず、風食をしているということは、その柱が元は外に出ていた。もしくは面していたということになるわけで、そういう様なことを、丹念に時間をかけて調べました。そして今の様な建物ができ上がりました。大きく変わったところは、例えば今、ここを仮に上の一ノ間（図11・12）といたしますと、二ノ間という次の部屋でございますが、修理前は二つの部屋に分かれておりました。しかし、天井のまわり縁に古い材が残っておりまして、そのまわり縁がふた部屋にまたがって入っておりました。そのことから二部屋に区切られていたのが、まわり縁が二つの部屋にずっと一連に通っておりましたことから、この部屋はひと部屋であった事がわかり、本当に少ない痕跡をたくさん丹念にひろい集めて、この部屋が一室に復元されたわけです。そして、この間の床の横にも、現在、窓のようなもの（写真25）を復原いたしましたけれども、ここは実は、本当の意味ではよく形がわかりませんでした。しかし、窓であったということだけは、何とかわかったものですから、建

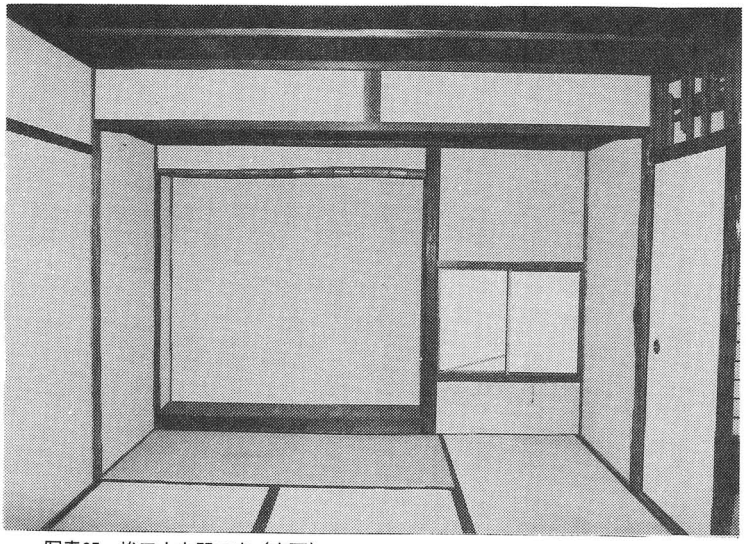


写真25　竣工中之間の床（東面）

具は新しいものでございますけれども、今のようなものを仮に入れてあるわけです。このように、各部屋の間取りも少しずつ変わっております。次に変わりました点は、例えば土間の部分が前よりは広くなっております。ですから、前の環山楼をご承知の方は、土間がもう少し狭かったんじゃないかというふうにお考えかと思います。しかし、解体いたしてみますと、土間の桁は切断しているということがわかりましたので、もう少し向うへ延びていたんだということがはっきりいたしましたので、今回、こういう様な形で使用するについて、土間を少し延ばしたわけでございます。ですから、延ばしたということについても、実証的な根拠がございます。ただし一件向うに延ば

したのみですけれども、実はもう二間ぐらいあったかもしれない。しかし、それは確認ができなかったわけでございます。このように各部分について、あらゆる痕跡を実証的に精査して、組み上げ、今の建物が成立いたしました。もちろん多少、旧形がわからなくて推定復元をしたという点も若干はございますが、主要の柱間についてはほぼ完全に調査をいたしまして、完全を期するようにいたしました。各部材の新旧に始まり、また復元した場合、形が不自然にならないかどうか、図面をおこしたりしまして、いろいろと比較検討をいたしました。例えば、屋根の勾配を決めたり、垂木の取りかえ材を決めたりするわけでございます。

話は変わりますが、よく発掘で、例えば山田寺の発掘が最近では新聞をにぎわしましたけども、軒の出までどうしてわかるのか、不思議にお考えになると思います。実は、それは発掘いたしますと、雨落ち溝が出てまいりますが、それは屋根からちょうど雨が降った時に落ちる溝にあたるわけで、柱からそのところまでの寸法を上にもっていけば、屋根の軒の出だということが、ほぼわかります。そういうようなことで、軒の出を決めていくわけですが、環山楼は移転をくり返しましたので、発掘する必要がなかったのですが、垂木が二種類ございました。丸い垂木と四角い垂木です。実はこれはどちらが新しいか古いかということは決め難い点がありました。というのは、垂木を今の材に取り付けた釘跡が、それぞれ一箇所しかなかった。普通ですと、例えば桁が古いところへ垂木を打ちかえれば、釘跡は二回出てまいります。ところがどれも一回でした。し

かし、丸垂木と角垂木でこの屋根を作ることは、建築的には不自然で、整備しにくいことになりますので、ごく一般的な角垂木で今回は整えました。

次に、この建物がどういう性格をもっているかということを、私共は調べなければなりません。と申しますのは、この建物は、すでにパンフレットにも書いてありますように、江戸時代の中期、八尾の豪商であった石田利清さんが設けた郷塾とされていますが、塾のために最初から作った建物なのか、ないしは、石田さんのお宅にあった離れのような建物を転用したものなのか、というような問題を明らかにしなければなりません。これについて結論的に申し上げますと、よくわからなかったわけでございます。それからもう一つは環山楼と呼ぶことから、楼と申しますと、普通は二階建と皆さんお考えになられて、これは平屋でおかしいのではないかという疑問がでます。が、楼という言葉は屋号と同じ様に、建物の尾称又は美称というふうに考えますと、二階である必要は必ずしもないと存じます。今回修理をした限りでは、二階がついていたという痕跡は見出すことができませんでした。恐らく元の場所から、生駒の山並を見た時に眺望が非常に良い場所にあって、一種の楼の様な感じの建物であったと理解していただければいいかと思います。しかし、全くなかったかと言いますと、何回か修理移転の過程で失われてしまったということも全く否定することはできません。その点の決め手は実のところはなかったというのが本当です。そこで、そうした楼について少し考えてみましょう。楼郭建築といいますと、櫓のようなものから、

室町時代の喫茶の亭、禅宗寺院の方丈などに二階があり、そのうち数寄屋風な喫茶の亭ではあのお茶の遊びが行なわれました。室町時代の後期になりますと、庭園はそれまでの池泉廻遊式の庭園から築山を作り、立体的なものになりました。庭が立体的になるということは、一階から見たのでは眺望が悪いので、二階建にするということがありました。例えば石川丈山の詩仙堂のような建物が石田さんのお宅にあったといたしますと、いわゆる楼のような二階部分がちょっとのった、見晴らし台のようなものがのった建物であったということも否定できないわけです。残念ながらその点は、先程申し上げたようにわかりません。単なる「離れ」であったかもしれません。次に櫓の発展変化した点について少し触れてみましょう。櫓がむしろ退化した形で残っているものとして、八尾は寺内町として発展してきて、真宗寺院の本山がありますが、真宗寺院には太鼓楼とかお茶所という二階建の建物があります。入口に近い脇に二階建の建物がありますが、私は一向一揆の過程で退化しながら残ってきた櫓ではないかと考えております。それと、もう一つ、今申し上げました庭を見るための施設としての庭間建築としてのあり方というのが楼にはあります。そうしたものの著名なものは、あの西本願寺に国宝の飛雲閣というのがあります。もともとは飛雲亭と言っております。ですから、ああいう三階建の建物、それから二階建のものもいくつか遺構の上ではございます。三渓園にあります聴秋閣は二階建ですし、それから、今ちょっとはっきり覚えておりませんが、京都の禅宗のお寺の中にもそういう建物が、文化財になっておりま

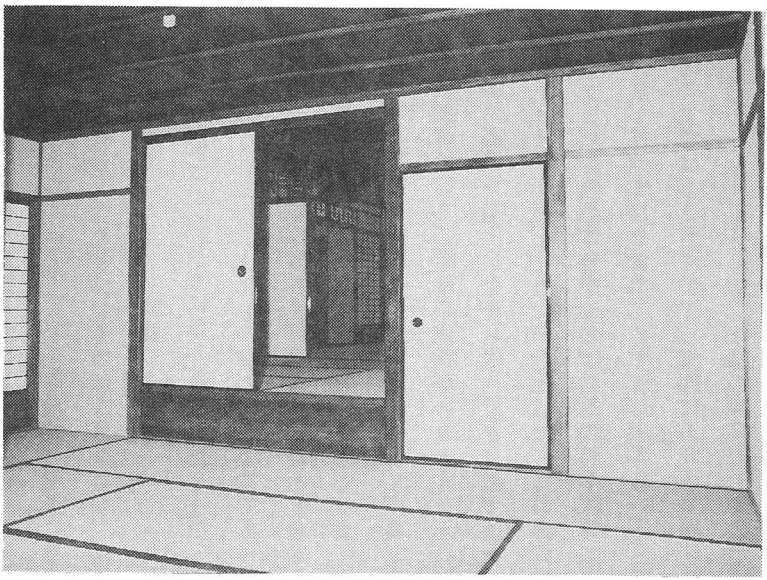


写真26　竣工口之間から中之間境を見る

せんが、残っております。これも一種の庭間建築と見られます。さて、そういたしますと、この建物はどのような建物をうつしたものかということになりますが、少なくとも庭間建築の流れをくんだ数寄屋風の建物の流れをくむ環山楼のあり方がひとつあると存じます。それからもう一つは、塾としての機能がこの建物の中にどのように盛り込まれているのだろうかということを考えておく必要がございます。

次に、第二番目の点を考えてまいりましょう。この部屋にお座り下さる前に、そこの下の三番目（写真26）の部屋と非常に段落差がございますね。これは、普通の家ではちょっと見られないことです。そういた

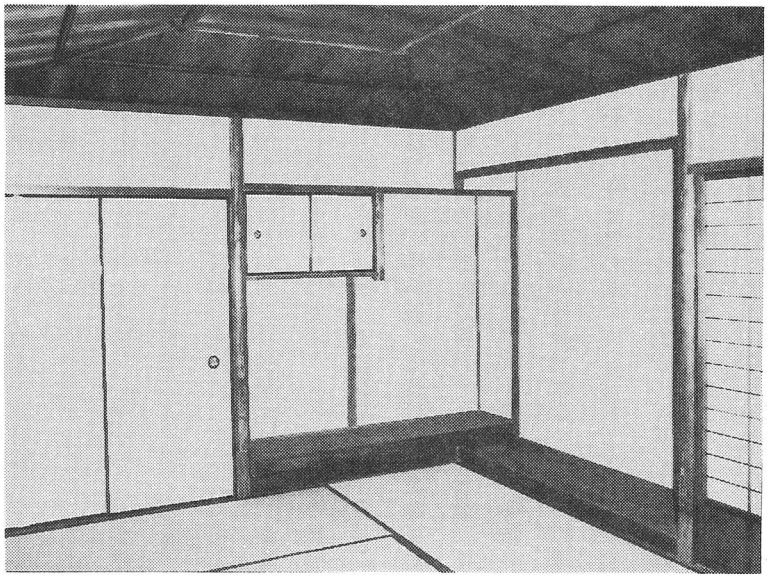


写真27　竣工奥座敷室札

しますと、例えば、こういうところの一の間、二の間、今、お座りいただいておりますような部屋は、封建時代のことですから身分階級によって、その占める座に区別があったと考えられます。その他の一般の方々は下の方に座っていたこともあったかもしれません。普通の、いわゆる民家とは、このあたりがちょっと違います。それから、お座りいただいた時におわかりいただけると思いますけれども、こういうふうに昔の家は、ふすまを取ることによって、全部広く使えて、これが日本住宅の非常にいい点ですが、空間の転用性が出てまいります。これは一方では住宅として考えます時には、プライバシーの確保ができないということに

つながるものですが、日本の住宅が冠婚葬祭を中心に作られたとされるのも、この様にふすまを取りはずす事によって広い空間を得ることができるという利点からでございました。私塾としての特色と申しますと、床も半分違い棚をつくりつけにした床ですし、見えないと思いますが、床に掛けた軸を動かせるように非常によく考えてますね。まわり縁の中をくってあって、全部金物が動くんです。一応、三幅分だけここにはあって、これなども動くんです。いろんな幅のものをかけた時、何をかけたかわかりませんけども、金具が動くんです。非常に細かい仕事がしてありますね。それから床廻りに使用されているこの柱は面取柱とみられますが、この柱はこのところで、貝付の上の部分だけはってあるんです。で、これは角柱に張ったものと私は考えまして、めくってみたんですが、中の柱には壁になった傷とかいっぱいあるんです。そこで、私はそういうのを全部むいてみて、そして復元をしようと最初は考えました。その材は古めかしい材で目がつんだものでした。今の材木はご承知の様に、年輪がものすごく粗く、私達はよくしらたのかかった材と言って、あまりいい材木ではない。いい材は目が細かいんですね。昔の大工さん達はそういういい材は、よく繕いをいたしまして再利用いたします。どうもこの古材はそうしたものであるということが、後になってわかってまいりました。最初は古材の傷を一生懸命、その他の部材と合わせましたが、復原できそうもない。このような事実は、この建物の性格を物語っています。しかもその柱は繕っていながら非常に細いんです。柱が細いと今の時代ですと、お金が無かった

(写真27)

んだろうとみなさん思うかもしれませんが、そうじゃないんですね。こういう数寄屋風の建物は、品良く作るためにわざと柱を細く作ります。柱を太くすると品が悪くなるのです。数寄屋風の建物では柱がすでに細いので、角柱を使いましても一般の書院造りのように面をたくさん取らないのです。普通私達が建物を年代判定する時には、面取りが大きければ大きいほど古いんです。お寺でも何でもそうです。円柱の場合はありませんけれども、角柱ですと、この面があればあるほど古いんです。太い柱を細く見せるために面は取るんですが、環山楼ではもともと細いものですから、取る必要がないんです。ですから面だけで判断いたしますと、これは新しいと思うことになるでしょう。しかし、柱の細さ、面の無さは数寄屋建築、庭間建築であるというふうに考えることによって、多少、その性格を推定することができます。例えば石田さんのお宅の中にあった、離れの様な建物が転用された可能性があることを示唆するわけです。しかし、じゃあこの柱の中に入っているような細い柱が全部についてあるかというと、そうではなく限られている。しかも、これらの材は当初の柱位置を守っておらず、むしろそれらを用いて再建したような様子なのです。最初から私塾として作ったものかどうかわかりませんが、全体としてみる時には、普通の建物としては見られないので、塾として再建してこの建物はでき上がってきたとみられます。

どうも話があちこちとびましたけれども、建物の特色といたしましては、教育施設としてのあり方も、この中には加味されている。そして又、一部には古材を使用しながらも数寄屋風な性格

が、特に今おりますこの一の間には、そういう感じが非常にあります。室札の使い方なんかも非常にうまいですし、隅の方で入り込ませて、床をつくっておりまして、高さも変化させております。どちらが床でどちらが棚を設ける部分か、明確にしない点は、建物にやわらかさを与えております。室札のとり方もうまくまとめており、非凡なやり方と思います。皆様のお宅では、床のある場合には多分、床と違棚がとなり同志に並んでおりますね。しかし、ここではそうではありません。床に脇床が入り込むような形で、脇床に天袋を一部とり、これに押入が並びます。床脇に押入を取るのは新しいことで、古い時代はないわけです。江戸時代ぐらいから押入れはできてまいります。通常、床の脇に違棚、床と矩の手に書院をとるのが正式ですが、古い時代には必らずしもこの形式をとらず、書院の脇に違棚があったりいたします。書院がつくりつけの机とすれば、違棚は文房具をおくサイドボードであったといえましょうか。室札は当初、機能があったわけですが、装飾化して日本の住宅の基本的な要素となりました。数寄屋建築ではそういう定形的配置を柔軟な姿勢でくずしました。この様な室札は数寄屋風な形にしたということになります。

ところで、このような建物がお寺とかお宮の建物と違う種類の建物であるということはおわかりいただけると思います。この建物は私立の学校ということで、その性格は庶民の文化財であるということになります。すなわち、お寺やお宮が支配者階級が建てたものといたしますと、それとは非常に対照的な性格をもっているものであるということになります。この点で環山楼は庶民

文化をひとつ代表する建物であるということになるのではないかと思います。この建物のことについて、ひとつ残念に思いますことは、この建物が元あった場所に建っていないということです。なぜかと言いますと、建物は文化財ですが、その塾の教育が行なわれた場所にあってこそ、皆様から忘れられないでいく、ひとつの条件になると思うんです。しかし、これが残りえたのは皆様方の、この強い関心と要請があったから残ったのですから、よしとしなければなりません。

さて、次に二番目の、環山楼を取り巻く文化財的な環境について少しお話を申し上げたいと思います。それは、今申し上げましたように、これまでの文化財の概念というのは、大体が社寺建築中心主義であった、というふうにみていいのではないかと思います。現に重要文化財とか国宝に指定されているものを見ましても多かったわけです。しかし、ここ十数年のうちに、そういう文化財の大半を占めるものが民家とか、そうしたものが非常に増えてきたということです。これは私達の生活の過程を残していこうとする立場でございますから、非常に心強いことです。国の保護の手はのびてまいりましたが、例えば、こういう教育施設の様な、特に私塾の様なものというのは、いわゆる国の基準の中にのっていません。閑谷(しずたに)校とか藩校などは、半分、公のものでございますから、指定されたものはいくつかございますけれども、こういう私塾で残ったもの、すなわち建物まである江戸時代のものとして残っているというようなものは、国レベルの建造物は他にはありません。例えば松下村塾があるじゃないかと皆さんおっしゃるでしょうけども、あの

建物は明治の建物です。そういたしますと、もうほとんど江戸時代のものは、これまで指定されてなかったということになります。この建物が残りえたということは、この点で画期的であったといえると存じます。ところで、国の文化財を指定する時には国の、中央の判断がございます。つまり一流でなければならない。そういう判断のみで物を指定していく場合にはどういうことがおこるでしょうか。二流、三流のものは当然落ちてくることになりますが、それと共に、恐ろしいことは、地域的なものが国の判断にのらないということでございます。つまり、地域の文化財は国の法律では守ってもらえないことになります。そうしたら、地域独特のものは、その地域で残していくことを、地方公共団体の判断で残していくことを考えていかなければならないということになります。この建物なんかは、まさにそういう性格をもっているということになります。そういう点で、私は文化財の指定のあり方というものを、この建物を通して考え直すこともできるのではないか。それからまた、そういう国だけの指定でよいだろうか。地方公共団体が各地域において重要な文化財を保護していく必要性があるということになります。

次に、ちょっと視点をかえて江戸時代の建築、というようなことで、この環山楼も含めまして、少し考えてみたいと存じます。実は、文化財の指定の場合には、これはどの分野でも同じことかと思いますが、江戸時代のものというのは、これまで除外され、江戸時代のものなんかたくさんあるというふうに言われてまいりました。文化財の指定から江戸時代のものははずされ、指定す

る場合があるとすれば、それはどういう場合だったかと申しますと、建造物では、例えば西本願寺の阿弥陀堂と御影堂が指定されているといたしますと、そういう所にある江戸時代のものについては、その境内の一角を、景観を構成しているものとしての価値があるというふうな概念で指定されていきました。だから、それ自身によさがあるとかどうとかいうのは別の問題で、その所に大きな文化財があり、それを取りまく周辺のものもついでに指定しておこうじゃないか、というのが真実に近い指定であったわけです。なぜそういうふうな指定の仕方しかできなかったかと言うと、ひとつには江戸時代の文化財に対する学問的な偏見がございました。その学問的な偏見はどこから生じたかと申しますと、建築史の分野では江戸時代の遺構の調査が不十分でした。たくさんあるからいいだろうという考え方がその裏にございました。ところが、近年これを調べてみますと、たくさんはないんですね。たくさんあると思ってたものがない。そこで文化庁では建造物については、全国的にこれを、江戸時代のものを調査し始めているという状況です。その調査は今、やっと半分が終わったぐらいです。ですから、これが終わるのには、まだ十年かかりますから、その間に無くなってしまう建物は続出するのではないかと私は思います。遺構の確認が行なわれてないということがあったものですから、そういうものの確認をして、整理台帳のようなものを作り始めました。その上に立って、江戸時代の文化財の基礎的な研究が行われていきませんと、こういう学問的な偏見というのは、無くならないということになります。しかし、よく

考えてみますとそういう学問的な価値以前に、江戸時代の建築が私達が生活している、この町中にあるということが問題でございます。すなわち、私達の町の景観の一部を構成しているものであるということで、近年、町並、これは古い町並だけじゃありません。私達が今住んでいる町並を整えていこうということで、環境条例というものが各市町村で制定され始めてます。そうした中でよりよい環境を求め、作るために私共もその仕事に関与しております。江戸時代の文化財は現在の生活に密着しており、私達の眼にいつも触れているものが多く、町や村のシンボルになっていると思います。例えば、自分の近くのお宮に生まれた時にはお宮参りに行って、また、そこでご両親なんかと遊んだ記憶がおありと存じます。そういう記憶というのが、いつもそこにあることによって、私達はそれを町の座標軸として、町に対する親しみや安心を感ずるわけです。例えば、今まで住んでいた家のすぐ横の方にマンションがいきなり建つとか、それから突如、その懐かしい普通の民家にしても、ちょっと古めかしい家があったのが新しくなった時は、なんとも落ち着かない気持ちを私達はいだきます。人間が生まれてから死ぬまでの間に最低限、これくらいのものは懐かしさをもって存在して欲しいという、そういうふうな町のあり方というのは、人間の生き方にとって、ごく自然なものとして受け入れられるわけですから、そういう中で、この江戸時代の建築というのは、まさに私達の記憶に生きているものであると同時に、今の町並を守っていく上での、ひとつの出発点になっていると、とらえ直すことが可能です。そういうふう

に考えてみますと、こういう社寺、民家、町並というようなものが日常生活に非常に密着した、私達はそれから直接的に何も現実的には得ることはできませんけれども、何と言いましょうか、そういう懐かしさとでも言いましょうか、ないしは、落ち着けるとでも申しましょうか、そういう生きている伝統に囲まれているということになって、親しみのある景観というのが、そこにうまくこれらを取り込んでいけば、成立してくるというふうに考えることができるかと思います。

江戸時代の建築は、これまではつけたし指定的な位置に甘んじていましたが、その研究が足りなかったり、生活に密着しているという重要性が認められて、町を構成する伝統建築としてとらえ直すことができるという点をもっていることを、私は申し上げたかったわけです。しかも、江戸時代の建築はほとんどが地域の文化財であります。国のレベルで判断した場合には、指定候補には落ちてしまうものが多いということをご理解いただけますと、例えば環山楼はこの地域にとって、国のどこか遠い所にある一級の文化財よりも、もっと大切なものとしてとらえ直すことができるのではないかというふうに考えられることです。

私は江戸っ子なものですから、話が速くてわかりにくい点があったかと思います。

ところで、私達の生活に関係する江戸時代の社寺建築について、別な観点から少しお話しをしておくことにいたしましょう。まず、江戸時代の社寺建築の機能的な側面としては、どういう面があるか、ちょっと視点を変えて考えてみたいと思います。

まずひとつに、これは機能的と言えるかどうかわかりませんけど、先程来申し上げてきましたように、懐かしさのある建築が江戸時代のものであるという点がひとつ、それからもう少し、今度はハードな面に側して考えてみましょう。私共の周辺にあるものはほとんどが、コンクリート造りの五階建の建物が多いと思います。コンクリートでは五階以上のものを作ると損なんですね。五階建以上を作ろうとしますと、鉄骨鉄筋コンクリート造にしなければなりません。というのは、コンクリートというのは比重が重いんですね。自分自身が重いから、六階、七階のコンクリートを作りますとね、一階の柱が太くなって不経済になるんですね。ところで五階建のコンクリートにした場合、この五階建の建物は関東大震災と同じ位の地震がきたときは、施工精度なども考慮すると、倒壊の危険の高いことが警告されています。二階ぐらいか三階ぐらいに力が一番かかります。だからそこだけがぺしゃっとつぶれると言われています。四階、五階はたぶんつぶれないでしょうから、上の人は出ない方がいいと思います。出ますと、窓ガラスがありますから、それで死ぬ程の傷を負う。特に高層の場合なんかでは、非常に危いわけですね。関西は地震が少ないようですが、地震力はかなり蓄えられていると言われていますが、万一そうした災害が起った時どうするかというのは行政当局としても大きな問題であろうと思います。そういう災害が起った時、どこへ避難するでしょう。多分、私は今のところは小学校や公園だと思うんです。しかし、その小学校は自分の近くにあるでしょうか。自分が逃げていく、例えば何かけがをしてでも、逃

げていけるような場所が近くにあるでしょうか。そうした場所は意外に少ないと思います。そういう時に、例えば社寺建築のもっている境内というものを振り返ってみましょう。ここには必ず木があります。その木は火災をまず防ぐはずです。中にはよく燃える木もありますが…。これは火を防ぐことが可能です。それから本堂は、住職さんにおこられますけれども、非常に中が広いんですね。そうしますと、応急の場合にはすぐに利用させていただけるというようなことがございます。このように考えますと町や村の社寺は、昔そうであったように、半公的な空間の意味をもっているのですから、こういうものには市の方で多少援助をする。その代わり、そういう空間をオープンなものにしてもらう。門を閉めて入れないようにするんじゃなくて、みんながいつも近づけるような空間に神社の方でもしてもらう。お寺の境内も開放してもらう、というふうな事を御願いすることもできるかと思います。これは見方を変えますと、一種の避難地域ともなり、また私達の町にうるおいを与えるグリーンゾーンであるというふうにもみることができます。これは非常にドライな考え方ですが、私は文化財、特に建築が専門ですけども、私にはこの様な提言がひとつできるのではないかと思います。次に地域文化の振興というようなことから少し提言をさせていただきます。これは新聞の切り抜きを持ってきたものですが、こういうことを言っております。一九八二年の十月頃、地域文化の振興ということで諮問機関である懇談会が自治省に提言をしております。それはどういうことをしているかと申しますと、「地方自治体の文化行政で

は、高度な芸術文化の保護育成や、文化財保護だけでなく、日常生活に密着した生活文化、地域文化の振興にも力を入れるべきだ」ということを言ってるわけです。すなわち、国段階のそういう文化振興のあり方、それから地方公共団体のあり方とはおのずから別のものであるはずだろうというふうな、ないしは手が届かない、国のそういうふうな面について、この自治省の諮問機関である懇談会が自治省に提言をしております。そうした具体策といたしまして、こういうことを言っております。一番といたしまして、公共施設の建設などにあたって、地域の個性や伝統を生かすため文化アセスメント、これは環境調査ですね。このような調査を提言している。しかし、これが行われている所は非常に少ないわけです。その次にはいわゆる、史跡図とか古文書とか、郷土史関係のものが散逸しないように、古文書館を建てろということを言ってます。今はほとんど、これは資料館ないしは、博物館の一隅で行われているということでございますけれども、そうじゃなくて、その市の行政の全部がわかるように、そういう文献も保存されるように公文書館を、博物館じゃないですよ、公文書館として作るべきだと提言をしております。私は三年程前に、一年余りむこうへ留学をしておりまして、むこうの事情をつぶさに見る機会がございました。フランスやスペインを見てまいりました。で、そこには各県に、又、市レベルに公文書館があるんです。そこへ行きますと、この種の資料は日本では何年かたつと大体焼却をいたしますが、そういうものが全部入るわけです。これを誰でも見ることができる。もちろん中には、まだ充分整

備されていない所もありましたけれど…。ご承知のようにフランスでは、フランスを非難するわけではないのですけれども、新聞がむやみにたくさんある。チーズとワインの種類がたくさんある。どれを食べて良いか、日本人はわからない。ハムでもいろんな味つけのハムがある。生ハムがある。ですから逆に言いますと、国民が日本のように三大新聞のどれかを読んでいるわけではなく、地方紙を読んでいるという事ですから、地域が独自の文化圏をもっているということになります。つまり、新聞や食生活が豊富なのは、自分の所属する地域の新聞を大切にし、又、生活、即ち文化を大切にしているということなのです。その地方紙に中央で行われていることがいくつか出る。日本と全く逆なんですね。ヨーロッパでは自分の地域のものがほとんどなんです。紙面を飾るのは…。チーズにしても、その地域で食べるチーズ、自分の家で作るチーズがもちろんありますけども、店でもたくさんの種類のものを売っている。それだけ取捨選択が可能であるわけです。ところが私共は、それがないわけですね。こういうピラミッド型の中でのあり方の文化がずっと多いわけですね。どちらがいいかは、それは私にもわかりません。しかし、地域というものがそれほど強くヨーロッパでは力を持っているというのは事実でございます。どうなるかはわかりませんが、日本はそういう方向になりつつあるのじゃないだろうかと、私は思っているわけです。こういう意味で、八尾で環山楼を残していただけたということは、先便をつけたということになり、八尾市民の皆様のご理解と行政の力があったと私は考えております。

それから、申し上げにくい事ですが、この提言は最後に、「文化行政はこれまで教育委員会にまかされてきたが、企画調整部門で、現実の施策と関連づけながら総合的に扱うことが検討されるべきである。」としています。つまり、教育委員会の片隅では地方文化というような問題は大きすぎて扱えないと言っておるわけです。もう少し直属のところとのコンビネーションが必要だというふうに提言をしているわけです。この自治省の諮問機関の委員長は、国立民族学博物館長の梅棹先生ですけれども、このように提言をなさっておられます。行政はいつも批判ばかりで大変とは思いますが、やはり、新しい考え方を早く導入して、独自にできるような、片手間でやるのではなく、専従の人員やスタッフをそろえて、この問題に着手していただきたいと存じます。

何かとりとめのないお話しとなりましたが、環山楼の復原工事をさせていただきまして、それを取り巻く状況などをお話し申し上げました。

昭和五八年一一月一九日

於　環山楼

(註)　本文中の写真・図版は(財)八尾市文化財調査研究会「教育施設の建築的研究」―私塾・環山楼の調査研究を中心として―一九八三より引用した。

叡尊の足跡

府立八尾高校教諭

棚橋利光

今日は西大寺のお坊さん、叡尊、今僕は「えいそん」と読みますけど、正式には「えいぞん」と読むらしいです。そのお坊さんを中心にお話をさせてもらおうと思います。

ただ、私は仏教を特に勉強したことはありませんので、ほんの上面なんですけど、たまたま最近、こんな本を見つけたのです。これは『西大寺叡尊伝記集成』という非常に便利な本です。西大寺叡尊さんに関することが一切合切全部入っているみたいですね。法蔵館から昭和五二年の発行です。これを見ますと叡尊さんのことは全て載っているというので、八尾関係のことがあるかないかと調べているうちに、おもしろいなあと思いまして、今日の話題にさせてもらいました。

その他、叡尊さんについてのいい本は、この『叡尊・忍性』（昭和三四年）ですね。また、古いですが、吉川弘文館の『人物業書』、ここにも叡尊と忍性、二人の人の伝記があります。これは和島芳男さんという神戸女学院の先生が書いた本ですが、この本が今のところ、叡尊さんの伝記としては有名です。この本を参考にして、叡尊という人がどんな人で、八尾とどの程度関係があるのか、その様なことを調べましてお話しをしたいと思いますが、特に取り上げてこれをずっと研究しているというふうには思わないでほしいと思います。

叡尊というと、高等学校の授業で一行だけポッと出てくるのですが、それは鎌倉時代の仏教のところでてきます。鎌倉時代に法然・親鸞、それから日蓮、そういう方の努力で新しい仏教が

できました。あの頃、奈良のお寺に東大寺とか興福寺とかあり、西大寺も古いお寺でそういう奈良の古いお寺ごとに有名なお坊さんがいたということで、叡尊がでてきたのです。

先程言った様に教科書には一行、十字程度でてくるだけです。鎌倉時代のあのへんのお坊さんは皆、年代的に一緒ぐらいの人なのです。だから、生没年を辞書でひいてみましたら、だいたいこんな感じになっています。浄土宗を作られた法然上人（一一三三～一二一二）は一番古い方ですね。その後、浄土真宗を作られた親鸞上人（一一七三～一二六二）、そして西大寺の叡尊さん（一二〇一～一二九〇）、日蓮宗の日蓮さん（一二二二～一二八二）、それから念仏を唱えるので有名な時宗を作った一遍さん（一二三九～一二八九）、この人々がこの時代です。だから、みんな年代がだぶっているというか、どこかでひっついているという感じです。

法然、親鸞、その次が叡尊、そしてこの叡尊という人は奈良の西大寺、これは奈良時代には東大寺と並んで大きなお寺だったと言われています。東大寺とこちら側が西大寺、今ももちろん近鉄の西大寺の駅を降りました所に西大寺というお寺があります。奈良時代には東大寺と並ぶ大きなお寺だったのですけれども、それがだんだんさびれてきて、そしてこの叡尊の時にもう一度復興したのです。西大寺の中興の祖、西大寺をもう一度盛り上げた人、その人が叡尊という人なんです。

叡尊がどういう内容の宗教を言われたかという詳しいことは別にしまして、この人は奈良で生まれて、最初、空海の真言宗を勉強されている。そういう中で、空海さんが、お坊さんである以

上は「戒なくしてなんぞ致らんや」、要するにお坊さんとしていくらいい事を言っても、またお経をいいように読んでも、やはり坊さんの修業というのですか、生活ですね、殺生をしないとか坊さんとしての規則をちゃんと守らなければいけない、そういう事を書いているのを読んで、非常に発奮し、お坊さんの戒律、修業、生活をきっちりする、そういう勉強をされて真言律宗というのを広めたのです。

結局、この人の教えはいつも生活を正しくする。そして殺生禁断、それからもう一つは貧しい人を救済する慈善救済、こういう様な面で大きな教えを始めたと言われています。いわば、殺生をしたらいけない、そしていつも貧しい人のために救済をする、そういうのがこの人の特徴なのです。

そして、この人はいつも民衆の中に入っていったのです。大きな宗教は貴族とか、武士とか、そういう財産のある人や身分のある人が中心だったのですが、この人はそういう人達はさけて、一般の人の中へ入っていって、そして仏教を広めていった。そういうふうに言われています。それで、一般の民衆へ入っていって民衆を助けたのです。信仰の面では文珠菩薩という文珠さん、この仏さんをものすごく信仰したのです。文珠さんという仏さんは、貧しい人の形となって現われてくるといいます。

それから、こういう民衆に入っていく、民衆のためになることをやったといえば、昔、奈良時

代には行基という人がおりました。奈良時代の行基菩薩、この人もものすごく尊敬したといわれています。

それからもう一つは、もっと古い人で日本で最初に仏教を広められた聖徳太子、この人も人々のために悲田院とか、施薬院とか、療病院とか、ああいう民衆のために、貧しい人のために慈善救済を実践されたので、そういう意味で聖徳太子さんも信仰した。行基を尊敬し、そして文珠菩薩を信仰し、そして民衆の中へ入っていって慈善事業をやったり、殺生をしてはいかんとか、そういうことをずっと教えられたと、その様に伝えられている坊さんです。大体、叡尊さんという人の信仰面はこういう人だと考えられています。

では具体的に、どの辺をどれだけ歩いておられるかというので、最初に皆さんのプリントに刷っておいたのですが、それの始めのところにありますこの地図(図13)です。奈良県とか他府県のところはちょっと省略させていただいて、大阪府関係ですね、大阪府関係で叡尊さんはどの辺の地域を歩いて人々に教えてこられたか、そのへんのところをこの本から引き出してきたのです。

この本というのは、『金剛佛子叡尊感身學正記』そう書いていますが、これ正式には『こんごうぶっしえいぞんかんじんがくしょうき』と読むのですが、これを略して普通、『感身学正記』と呼ばれています。この本は叡尊さんが弘安八年(一二八五)、つまり八五歳の時、自分の一生を振り返って、私はこんなことをしてきた、まあそういった事をずっと書き出された。そして、本

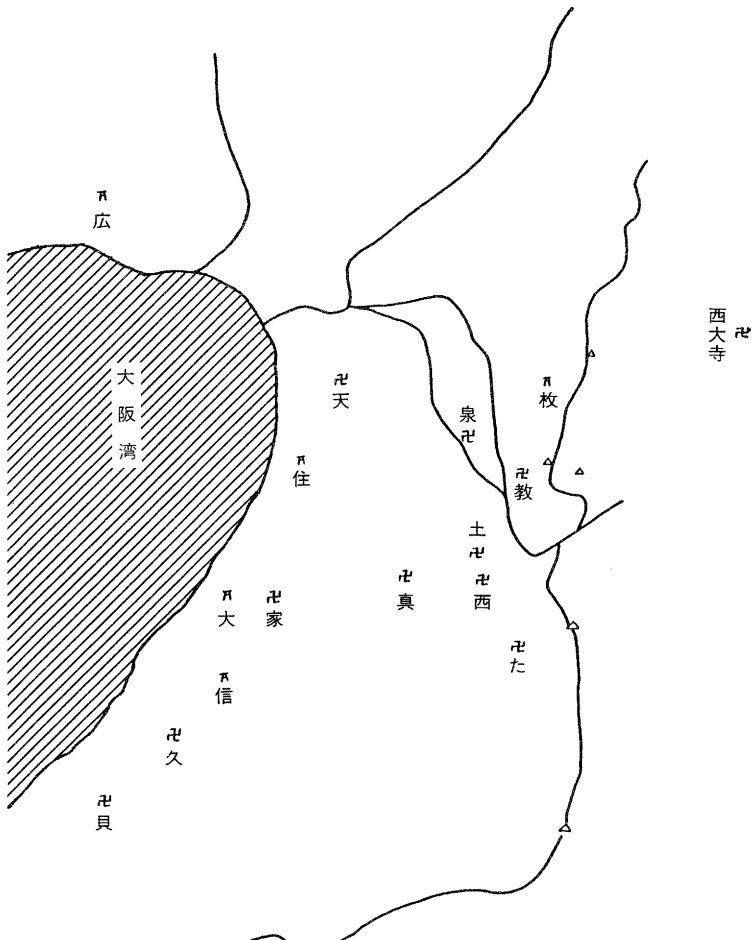


図13　金剛佛子叡尊感身学正記より

にされたわけです。上・中・下とあるのですが、これが叡尊さんの自叙伝になるのです。ものすごく月日をきっちり書いておるわけです。だから何か手元に昔の資料を全部まとめておいて、それをもとに整理して書いていかれたわけです。だから非常に詳しい。その本の中から叡尊という人がどの辺を歩いて、どの辺で布教をされたか、そういうことをみてみたのです。

そうすると、西大寺から大阪府関係だけでみてみますと、あちこち行ってます。一番最初に叡尊という人が大阪府に出てこられたのは、その図の堺のところを見ていただきますと、大鳥神社のその横が家原(えばら)寺、ここへ最初に行かれたのです。これが四五歳の時です。このお寺というのは行基菩薩の行基さんが作られたお寺なのです。ここで一つの特別な別受戒といって自分が独立して自分がそういう戒律を広める出発点になさったのです。

そして、その後あちこち行ったのですが、例えば有名な所でいきますと、二上山の麓の方、太子御廟、聖徳太子のお墓のあるところです。現在あるお寺は叡福寺です。そこへ行っておられるのです。聖徳太子は病気のための悲田院とか療病院とか作られましたですね。そういう聖徳太子の実践を自分もやりたいということで、聖徳太子を拝むためにそこに行っておられるのです。この叡尊さんは、その後聖徳太子を崇拝して太子講式の文句なども作っておられますが、そういう点で大事なとこへ行かれたのです。それで、その『西』と書いてあるのは西琳院と読みます。羽曳野市にあるお寺です。これはもう奈良時代よりずっと前からあったお寺ですが、やはりさびれて

おったのです。けれどもそこへ行って再興されたんです。その上の『土』て書いてあるのは土師寺、今の道明寺です。ですから最初に家原寺、行基のお寺へ行って、そしてその後太子町の叡福寺とか西琳院とかこういうお寺に行ったりしているうちに蒙古襲来があったのですね。

そしてその蒙古の襲来をくい止めるために叡尊さんはお祈りをされるのです。その時に行かれた所が生駒山脈の生駒山の所に『枚』て書いてますね。これが枚岡神社です。そこへ行くわけです。それから天王寺、南へ行って住吉神社、だから叡尊さんは蒙古襲来を思ってお祈りのために枚岡神社とか、天王寺とか住吉さんへ行ってるわけです。その他、叡尊という人は伊勢大神宮に出かけて行きお祈りした。又、石清水八幡宮、ここでもお祈りをしたんです。こうして蒙古襲来をきっかけに枚岡、天王寺、住吉、神戸の広田神社、そういう所へ行っておられます。なかなか活躍されてるわけですね。

そして、八尾の方では教興寺、それからもう一つ泉福寺、これははっきりわからないけれども「せんぷくじ」と読みます。後、羽曳野市の西琳寺、土師の里の土師寺、その左横のところの真福寺、これは今日この時間に現地説明会があるそうです。つり鐘を作った所の真福寺という、あの辺は鋳物作りの鋳物師がおったのですね。その真福寺です。それから後、信太社、その下が久米田寺ですね。久米田寺のその下のところが貝塚。ここは近木郷の地蔵堂、今はぐぎなし堂て言ったかな、貝塚市にあるのですが。民衆のためになる事をやろうとして、河内方面でも大阪方面

でも方々歩きまわって、そしてお寺を作り、施半とかいろいろなことをやられた。そういうようなことをやって西大寺のお寺を大きくしていったのです。

この人の一生の中で大きな事はいっぱいあるのですけれども、まず一番大きな事は、先程申し上げた蒙古襲来のことですね。この時にこの人はどんなお祈りをしているかと、それを次に見ていこうかと思います。それでは(史料1)足跡年表の方ですね。ちょっと小さいですけれども、先程の叡尊さんの感身学正記の中から大阪府関係の出てくる記事を全部書きぬいてあるのです。最初の方ですね。年令四五歳の寛元三年（一二四五）九月の中頃に和泉国の家原寺へ行ったと、そうしてそこで別受戒といって、えらいお坊さんが記念になる大きな儀式をする。それがすんだ後、九月一六日に住吉社へ行って、住吉社の神宮寺へ行った。そしてここで自分の、叡尊の弟子の方が中国へ行くのですが、それのお祈りをしたというのですね。次の寛元四年は四六歳で、二月に太子の御廟へ行かれてお経を転読し、日本の国の安穏を祈った。かっこの下の五〇二人というのは五〇二人の人に説教をし、信者として結びついたということです。その次の一〇月二五日には土師寺へ行った。

こうして順番にずっと書いてますから、又あとでゆっくり見ていただいたらいいですが、蒙古襲来というのは文永の五年ですか、まん中のちょっと手前ですね。一二六六年、この年に叡尊さんは六八歳ですか。この年の一月に蒙古の牒状がくると、蒙古から元の国へ挨拶に来いと、そう

西大寺長老・叡尊の足跡年表（大阪府下）

（叡尊感身学正記より）

年号（西暦）	年齢	事項・目的（数字は授戒人数）
寛元三（一二四五）	四五	9/中 和泉国家原寺（別受戒26人）→9/16 住吉社 神宮寺（渡海を祈る）
四（一二四六）	四六	2/26 太子御廟（転読、祈聖朝安穏）502人
		10/24 土師寺（河内一国諸宿文珠供養）236人
建長三（一二五一）	五一	3/上 河内安楽寺（安置供養釈迦尊像）111人
四（一二五二）	五二	解夏後 河内泉福寺（説十重戒）7/25 55人
六（一二五四）	五四	3/9 河内国西琳寺東顕珍家（説戒）232人→3/13 真福寺（始結果）165人→
		3/16 信太社→3/20 中尾寺32人→3/21 住吉社（講讃）473人
正嘉一（一二五七）	五七	3/上 和泉国近木郷 地蔵堂1173人 10/中 住吉遠里 西琳院（講戒）192人→
		10/下 天王寺新御堂（講戒）念仏堂731人
二（一二五八）	五八	9/28 西琳寺256人→10/1 誉田社（祈天下泰平、当年炎旱）→10/6 太子御廟
		（弘長二（一二六二）関東へ 2/4～8/15）
文永三（一二六六）	六六	2/19 河内西琳寺230人 12/3 河内国真福寺（塔供養）
五（一二六八）	六八	（1/ 蒙古牒状来る）
		夏意 天王寺（異国の難を払うため修勤）→8/19 難波浦（仁王護国般若経）
		住吉社（心経）82人→8/28 河内国亀井（講戒）釈迦堂650人
六（一二六九）	六九	8/ 河内国新福寺両法両人、河内国高安郡教興寺 11/27 教興寺（仏舎利を拝見）
七（一二七〇）	七〇	3/下 河内国教興寺（舎利供養）4/1 1694人
二（一二七四）	七四	（10/6 蒙古兵、対馬 10/20 博多 大風で退散）（文永の役）

年号（西暦）	年齢	事項・目的（数字は授戒人数）
文永三（一二七五）	七五	解夏以後蒙古人重来征を怖れる故に、異国降伏を祈り神社仏寺で随分勤行を修む
		7/25 平岡社（大般若経転読など）→7/28 天王寺薬師院→8/1 住吉社（海に向い礼）→8/5 河尻燈廬堂36人→広田社→8/10 天王寺薬師院832人→8/22 渡部寺、住吉社→
		8/23 浄土寺→（山崎へ）
弘安一（一二七八）	七八	10/16 勝尾寺無量光院182人→10/18 河内国交野郡神栄寺
四（一二八一）	八一	2/22 河内教興寺248人 2/24（講堂供養）→2/25 天王寺薬師院→播磨→有馬→
		3/20 多田院 3/24（本堂供養）432人
		（5/21 対馬侵略→7/1 大風のため元船沈没）（弘安の役）
		7/26 石清水八幡宮（異国の用害を脱せんため本朝の静謐を祈る）
		7/1 南北二京僧 560余人祈る 7/7 結願 8/15 多田院415人→8/22 天王寺薬師院→
		8/26 教興寺→8/29 西琳寺
五（一二八二）	八二	（紀州）10/20 和泉久米田寺（堂供養）→10/22 大鳥長承寺363人→10/24 大鳥社→
		10/26 河内国真福寺（釈迦堂供養）
七（一二八四）	八四	4/9 摂津国茨木村 9/27 天王寺別当補任の院宣
八（一二八五）	八五	3/14 天王寺入堂（別当坊、敬田院、五智光院、金堂御舎利）→4/14 教興寺、弁財天、講堂629人 9/18 河内国長曽根荘清浄光院 10/12 天王寺薬師院
		10/15 亀山上皇御幸→10/20 帰寺
正応三（一二九〇）	九〇	8/25 入滅

いう手紙が日本に来たのですね。この時から叡尊さんは天王寺に行きまして、そして異国の難を払うため勤めをやっているのです。お祈りをされたということです。そして、お祈りをするために八月一九日には難波浦、大阪湾の見えるところへ行かれたのです。そして、仁王護国般若経、普通、略して仁王経というのですか、こういう国の危険な時にお祈りをするありがたいお経なんだそうですが、この仁王経を唱えられ、そして、あの住吉社では般若心経を唱えられた。こうなるわけですね。だから、文永五年ですか、この時に初めて叡尊さん個人としてですけども、日本の災難を払うために、天王寺から難波浦、大阪湾へ行って祈られたのです。それからずっとみていきまして、文永一一年ですか、一二七四年のところですね。この年には一〇月の五日に蒙古の兵が対馬を犯しました。そして、一〇月二〇日には博多を犯したが大風で退散した。これが文永の役ですね。そこまでは何もしていませんから、蒙古の脅威というのですか、どの程度軍隊が来るのかわかりませんから、そんなにたいしたことはないと思っているのですが、ところが来てしまいました。それが文永一一年です。七五歳の時です。解夏、夏の修業がすんだ後、蒙古軍が重ねて日本に来るのをおそれるために、異国降伏を祈り、諸寺でお祈りをされたというのですね。まず七月二五日には枚岡社へ行って大般若経を読み、二八日には天王寺、八月には住吉さん、そして住吉の海に出まして、百人ぐらいの西大寺のお坊さんがみんな出まして、そこで仁王経の題目を海に向かって唱えるのです。異国難を払うためにお祈りされているわけです。その後広田神

社の方にも行っておられるのです。だから、この年は一生懸命拝んでいる。

そうして、もう一度蒙古が来るのですけども、弘安四年五月二一日、対馬が侵略されます。そしてこの時は、朝廷から叡尊さんに対して、ぜひ拝んでほしいと言われます。今度は天皇あるいは上皇の命令で拝むわけです。七月二六日には石清水八幡宮、ここで日本のお坊さん、特に奈良、京都のお坊さんが総出で拝むわけです。特に閏の七月一日、この時には南北の二京のお坊さん、五六〇余人が石清水八幡宮へ全部集まりまして、とにかく蒙古の襲来に対してお祈りをされた。そういう様になっているわけです。そして閏の七月七日に全部修業が終わった。こうなっているのです。

この時に叡尊さんはものすごくいい事を拝んでます。僕は以前に奈良の文化財の先生の講演会で聞いたのですけども、叡尊さんはこう書いてます。僕だったら蒙古人、まあ外国なんですから船でもぺちゃんこになって、みんな死んでしまえとまあ表現が悪いですけど、戦争ですからねえ。が、叡尊さんはお坊さんですねえ。そういうふうに拝んでいません。拝み方が違います。こう書いてます。「東風が吹いてくれて、そして吹き送ってほしい。蒙古の船を中国、元の国へ吹き送ってほしい。」と、そして「その場合は日本へ来た人をそこなうことなく吹き送ってほしい。」とこの様なことを言っているわけです。つまり、お祈りした時ですね、沈没してしまえとは言ってないのです。とにかく風が来て、そして船に乗ったままみんな送り返して、来た兵隊さん達が命を

失わんようにしてほしいと、そういうふうにおっしゃったと、だからなかなか、仏教の方らしい言われ方ですね。

たまたま、この閏の七月一日にお祈りした。その同じ時に博多湾の方では大風が吹いて、そして元の船が沈没したと、ほんとまあすごかったと、偶然の一致かどうか知りませんけど、そんなこともあって、その後閏の七月九日に博多の方から急使が来ます。そして、閏の七月一日に風があって元の船が滅亡したと、そういう知らせが入ってきます。そんなわけで天皇陛下はものすごく喜ばれて、叡尊さんの株がものすごく上がるわけです。叡尊という人は当時は最高のお坊さん、天皇から以下貴族や鎌倉時代の武士達が信頼する、そういう非常に立派な有名なお坊さんなのですね。そういう意味で日本で一番の人になったわけですね。

そして、その間次の一番最後に書いてあるんですけれども、弘安八年八五歳の時に天王寺の別当になっておられるのです。天王寺というのは四天王寺ですけれども、ここは聖徳太子以来の、日本で最初の仏教寺院です。ですからここの別当になるということは、昔からお坊さんのあこがれだったわけです。だから比叡山の延暦寺も一番偉い人は座主というのですが、三井寺の一番偉いさんとか、そういう偉い坊さんが自分の名誉のために四天王寺の別当になったのです。だからこの別当をめぐって比叡山延暦寺と三井寺園城寺とがしょっちゅう争って、三井寺が焼き打ちされたりするぐらいすごいのです。醍醐寺とかいろんなお寺がありますが、皆、一度はこれになり

たいんです。

そこへ、叡尊さんに、なりませんかと亀山上皇の方からさそいがかかりました。しかし、叡尊さんは断わるんです。が、なかなか断りきれんのです。鎌倉幕府の方からもいっぺんなったらどうですかと、天王寺の別当は今まで比叡山とか三井寺のお坊さんがなったんですが、鎌倉幕府が天王寺は日本の仏教の最初のお寺だ。比叡山延暦寺の下ではないんだから、比叡山のお坊さんや三井寺のお坊さんがなる必要もないのだから、世の中の一番のお坊さんがなったらいいではないか、と鎌倉幕府の方から推されたのです。そんなこともあって、とうとう叡尊は天王寺の別当になるわけです。最高の地位についたわけです。一番華やかな時ですね。その後九〇歳で亡くなられた。だいたい叡尊さんの一生を振り返ると、こういうようなことになるわけです。

これで一般的なお話は終わりまして、次に八尾市とのつながりです。八尾市で叡尊さんと一番結びつきが深いと今でも言われているのは、先程申しました山手の方にあります教興寺であります。今でも西大寺の末寺で西大寺の系統のお寺です。地名にもなっています教興寺です。このお寺は奈良時代よりもっと前からだと言われているのですが、そのお寺に叡尊が来られ、山手の方の人々の浄財という寄附を受けて、教興寺を建て直されたというように言われているのです。それで、この叡尊という人は自分で感身学正記を書いてられますね。そこを見てみたいのです。

同六年(文永)己巳　六十九歲

今年秋八月比。河内國新福寺同法兩人。參同國高安郡教興寺(俗号秦寺)。講堂本尊千手觀音。悲覆雨露。欲奉授之。其志元者。叡尊。昔從泉福寺。歸西大寺時。於信貴坂。適休息時。見北方有極高藤。尋案內者之處。秦川勝建立之伽藍也云云。於是予願佛法流布之恩。故悲歎之淚尤難禁也。雖有興隆之志。貧道之身難及。故空送年月之處。彼兩人知余志。發此願時。近邊尊卑勸少財將助之。卽傳聞隨喜尤深。然間。十一月廿六日夜。彼寺最初安置之佛舍利入御。廿七日朝。拜見之。渴仰之余。脫一衣奉供養。教興寺興隆始也。

同七年(文永)庚午　七十歲

三月下旬。持教興寺最初安置佛舍利。下河內國教興寺北津村鄉。(依念生房請。故宿彼住室。)日々參教興寺。作假屋。安舍利。於彼御前。講十重禁戒。四月一日。一千六百九十四人授菩薩戒。隨喜聽衆供養舍利。及准絹一万疋。

(金剛佛子叡尊感身學正記)

僕にしてもわからんのが多いですから、皆いっしょに考えていったらいいと思います。ちょっと読んでみます。文永六年、齢六九歲、今年の秋の八月頃、河内国の真福寺の同法兩人、まあ、

河内国の真福寺の二人の叡尊さんと同じ律宗のお坊さんですか、が同国高安郡教興寺、俗に奏寺と申す教興寺に参って、その講堂の本尊の千手観音が、雨にうたれているのを悲しんで、これをちゃんとしたお堂にしたいと思った。ちゃんとしたいという志のもとはといえば、私が昔、泉福寺というお寺より西大寺へ帰る時、信貴坂において休息をしたのです。北の方を見ますと、きわめて高い藤の木かなんかあったんです。そこで案内の人にたずねますと、このお寺は奏の川勝が建立した伽藍ですと言われた。ここで私は、それでは仏教を流布した最初の時のお寺である。その恩を思い出して、そのお寺がこのようになっているのは非常に寂しい。故に涙が出てしかたなかった。このお寺の興隆がしたい。興隆の志があるといえどもなかなか貧しく、貧道の身の上で、それに応じられない。それ故にむなしく年月を送っていた。ところが、この河内国真福寺のお坊さん二人が私の志を知って、この寺を建て直すという願いをおこせられた。その時、近辺のお金持ちもそうでない人も皆、それぞれお金を出し合って寺を建て直そうとしている。これを伝え聞いて非常にうれしいことです。と、この様に言っているわけです。

そうしている間、一一月二六日の夜になって、この教興寺に安置する仏舎利が西大寺に来ました。二七日の朝にはこの仏舎利を拝んで、服をぬいで供養しました。これが教興寺の興隆の始めです。そして翌年の三月下旬になって、叡尊さんは教興寺へ最初に安置する仏舎利をもって、河内の国の教興寺の北にある津村郷というところに行ったわけです。この津村郷では念生房の要請

敬白　河内国高安郡教興寺洪鐘一口
右一結諸衆同心合力且為仏法滅罪生善
且為法界衆生平等利益所奉鋳也
弘安三年庚辰（一二八〇）正月廿五日
大工　沙弥恵念
施主　美乃正吉　僧教善　坂上二子　僧行念
葛井末正　僧禅慶　僧善識　物部末次
坂上守末　坂上影助　管野友正　坂上助守
沙弥賢仏　山口末吉　物部頼安　坂上影恒
沙弥西念　安部吉弘　坂上助光　坂上助安
僧良運
左衛門尉中原清秀　僧念生
大勧進浄縁
修理本願南都西大寺長老叡尊

史料２　教興寺銅鐘名

によって、念生房という小さなお寺に泊まって、日々、毎日教興寺へ行っておられた。そして作業を見ていたのですね。仮屋を作り、仏舎利を安置して、そしてその前で人々に布教をされた。四月一日には一六九四人、すごい数ですね、それぞれに菩薩戒を授けられたのです。皆、喜んだということです。これが最初の教興寺と叡尊さんのかかわりです。

そしてこれ以外に高野山の資料館に行きますと、軒先にちょっと置いてある教興寺のつり鐘があるのです。（史料２）これは教興寺の銅のつり鐘の銘です。それによると、敬白と書いて河内国高安郡教興寺洪鐘一口、だからつり鐘が一つありですね。それが『右一結諸衆同心合力』です。だからみんなが力を合わせて『仏教興隆滅罪生善、且為法界衆生平等利益』のためにこのつり鐘を鋳ました。弘安三年、庚辰正月二五日、そこに大工さんと書いて沙弥恵念。施主、これはお金を出した人ですね。ずっと個人名が上がっているのです。だからこれはあの当時、近くにおられた人でしょう。美乃正吉、僧教善、坂上二子、僧行念とか、ずっと目で読んで下さい。こういうふうに

名前がでてるんです。

これ、なかなか興味のある名前で、もっとわかればいいのですけど、最初の美乃（みの）という名前は御野県主（みのあがたぬし）のあの美努の系統とちがうかなあ。その辺は全然わかりませんよ。今の上之島あたりに三野郷てあります。あの美努氏、あの系統と思います。それから坂上さん、今でも山手に多い姓ですね。坂上田村麻呂の系統かもわかりません。それから物部さんというのは、八尾には物部が多かったと言いますが、この時にはもう物部を名のってもなんともなかったんですかね。その他、一番偉いさんというか、一番左側、最後に左衛門尉中原清秀とか、何かちょっと武士みたいな人が出てきます。それから大勧進浄縁、これはお坊さんですねえ。叡尊さんのお弟子さんですけれども、それから最後に書いてあるでしょう。修理本願南都西大寺長老叡尊、ここにちゃんと名前があり、この教興寺を修理する一番もとの志をした人が南都西大寺長老叡尊なんですね。これがものすごく有力な証拠です。こうして今も、教興寺を作った時のお寺のつり鐘が残っている。非常にいい証拠が残っています。

もう一回、足跡年表（史料1）を見ていただきたいのですが、教興寺関係を見ますと、最初のところで、文永六年（一二六九）六九歳、そこのところが先程のことです。教興寺を興隆しようとされて、その翌七年が河内国教興寺、舎利を供養、一六九四人の人に戒を授けたということです。その後、教興寺が出てくるところは、弘安四年ですか、一二八一年、二月二二日、叡尊が八一歳の時、河

内国教興寺、ここで講堂という大きなお堂が教興寺にできたのですかね。で、二四八人の方に授戒をして下さった。だから教興寺が立ち直ったのは、ほとんど叡尊さんのおかげ、こういうことが言えるのです。

それで、ちょっと興味をもちましたのは、この教興寺のことと、先程言いました蒙古襲来とどうつながっているのかということです。今、見てもらっている感身学正記では特に教興寺と蒙古襲来と結びついているような記述はありません。文永六年、七年のこともそうですし、弘安四年も石清水へ行ってみんなが拝んだのですから、教興寺で拝んだ、異国降伏を拝んだという記述はみられておりません。ところが、いろいろ資料があり、次の表を見ていただいたらおもしろいなと思うのは、くい違ってるからおもしろいなと思うのです。

異国襲来祈祷注録	弘安4	9/22 教興寺に於いて阿一（開山始円上人）記す
	明応2	1/16 書写
文永1	7/8	大将軍中務卿宗尊親王、壱岐・対馬へ発向
	8/5	異賊降伏祈祷のため西大寺（勅使下向、其宣旨（天王寺・教興寺行幸有りと）
	8/6	天王寺金堂、百座仁王大会、道師叡尊
西大寺勅諡興正菩薩行実年譜 慈光編 元縁年間		
建長4	秋/7	河内州真福寺、落成仏の事を修す
	6 1/28	聖徳太子講式一巻を製作
康元4	秋/8	四天王寺で講説、聴徒二千余指
弘長2	2/2	泉福寺戒印秀律師（戒印房源秀）を監守とする

（行幸力）

8/7　教興寺に行幸有り

8/8　講堂千手堂前で仁王大会

8/28　敵船大破を注進有り

弘安4　7/20　異賊調伏祈祷のため西大寺へ勅使再三下向

7/27　異賊の船、博多へ入ると注進

7/28　叡尊、勅により教興寺へ下向

7/29　講堂千手堂前で百座大仁王会

7/晦　叡尊、山城男山八幡宮に参籠

⑦/1　修法

⑦/9　異賊の滅亡のこと注進あり

（註）

。教興寺遺等些阿一の草した興正菩薩講式（元享2）には弘安4⑦/1のことのみ

。興正菩薩行伏異須（建武2）には文永4仁王始行とあり

文永3　2/8　天王寺に於いて説法　南無思圓仏

11　10/29　叡尊、詔を奉りて天王寺金堂に於いて百座仁王大会を修す　亀山天皇行幸

相続きて、教興寺講堂に於いて重ねて仁王会を修す　亀山天皇行幸

1/5　蒙古船沈没と注進

弘安4　7/12　上皇、西大寺に臨幸

7/下　叡尊、勅を奉り教興寺で仁王大会を修す

7/25～⑦/1　男山八幡宮で修法

正応3　8/25　嗣法上首　極楽（忍性）[1]　船若（信容）[2]　泉福（源秀）[3]……海龍（幸尊）[5]……教興（阿一）[12]……（十七名）

その上の段ですが、『異国襲来祈祷注録』とこういう題のものなのですが、これは弘安四年九月二二日、この時教興寺において阿一というお坊さんが書いたわけです。この阿一というお坊さんは『開山如円上人』と書いていますね。教興寺を叡尊が中興してから最初に住職になられたん

です。だからこの人は如縁坊というのが正式なんです。教興寺の開祖、阿一如縁坊、この人が異国襲来の時、教興寺でお祈りしたときの記録を書いたものです。

この文章をひっぱって整理してみたらこうなるんです。文永元年にまず一回目の襲来があったと書いています。そして、ちょっと読んでみますと『七月八日、大将軍中務卿宗尊親王、壱岐・対馬へ発向』そして『八月五日に、異賊降伏祈祷のため西大寺へ勅使が向かう。そうして、その宣旨の旨では、天王寺、教興寺へ行幸がある』そういうことが書いてます。そして『八月六日に天王寺金堂で百座仁王大会、まあ仁王経の転読です。お祈りされる。そして導師が叡尊。この時も天皇の行幸があったということです。八月七日に教興寺に亀山天皇の行幸があった。そして、翌日八月八日に講堂の千手観音の前で仁王大会をやった。そして、八月二八日には敵船が大破をした。そういう注進があります』と、こういう記録をしているのです。

それからもう一つは『弘安四年七月二〇日に、西大寺へ勅使が来られて、七月二七日には異賊の船が博多へ入ると注進があった。で、叡尊が教興寺へ向かわれた。七月二九日には講堂千手宝前で百座の大仁王会が、そして晦には今度は男山八幡宮に参籠して、そういうお祈りをした』。そういう様に書いてます。

これが書かれたのが弘安四年の九月二二日とこういうようになってます。今、残っている西大寺にある本は明応二年一月に、一四〇〇年代になって写した本です。そういうことをちょっと、前

の足跡年表と見比べてもらったらどんなでしょうかね。何か、いろいろ違うなあと思ったりするのですが。普通、蒙古襲来は文永の一一年です。蒙古の手紙が来たのが文永の五年ですので、文永元年というのが、理解がしにくいですな。歴史の事実と違うというか、理解しにくいですねえ。（史料1）

それから弘安四年の方は、これは同じ年ですから、これは合うわけですが、こちらの学正記の方では教興寺は特に関係がないように書いてあるのですが、ここでは叡尊さんが教興寺に来られて、その後八幡さんへ行かれた。こう書いてます。上段の資料は教興寺のお坊さんが書いたということですから、教興寺を中心に書いているはずです。

それからもう一つ、それはその下の段ですね。『西大寺勅諡興正菩薩行実年譜』、これは西大寺にある興正菩薩というのは叡尊さんのことです。この人の伝記です。これは江戸時代の元禄年間に慈光という人が編集されています。この本の中では、まあこれが一番詳しく書いてあるのです。この本の中ではいろんな記事があるのですが、蒙古襲来のところを取り上げてみます。前の二つと違う点だけ取り上げてみますと、まん中よりちょっと後ろの方に、『文永一一年一〇月二九日、叡尊、詔を奉りて天王寺金堂において百座仁王大会を修す。亀山天皇行幸、ついで教興寺にも行幸』こういう記事があります。文永一一年の一〇月の記事ですけども、これが学正記にはないんです。上段の異国注録にもないんです。ちょっと比べていただきたい。弘安四年のところは上の文と同じです。だから、いろいろ本を読みながらまとめていったら、いろいろ違ったこと

があるんだなあと思います。ただし、それがどこまでが事実で、どこまでが後から書いたものか、そういうのはちょっとわかりませんが、とにかくこのように食い違いがあるということです。

特に、どなたも一応いわれているのは、その上の段の文永元年のところ、これはどうも何かおかしいぞと、みな言われています。それから下の段の文永一一年の文です。この文がここしかないんです。この行実年譜にしかないんです。この行実年譜というのは、ものすごく信頼性のある本なんです。江戸時代に叡尊さんのことや、西大寺のことをあらゆる資料を見て、全部書かれたわけです。だから非常に立派な本だと言われているんです。だから、この本は何を見て書いたのか、ちょっとその出典を知りたいです。おそらく、私としてはこの文は教興寺の縁起か何かを見て書いたんじゃないかと思うのです。現代の教興寺の縁起を次に掲げておいたので参考にしていただきたいんです。

教興寺　八尾市教興寺四〇六

当寺は聖徳太子が物部守屋を征伐された時、奏川勝が太子の発願をうけ仏教を始めて興起する寺、「教興寺」と名づけて創立され、獅子吼山三昧院と号した。金堂に弥勒菩薩、講堂に千手観音を安置し臨池式伽藍をなしたと伝えられる。鎌倉時代の、文永弘安の蒙古襲来の折、亀山、伏見院の御幸があり、西大寺叡尊は院の勅命をうけ、千手観音の宝前において蒙古降伏祈祷を営み、祈願成就をなしえた。その後永禄五年畠山高政と松永・三好の合戦で伽藍を焼失す。降

って江戸時代浄厳覚彦和尚の発願により現在の教興寺が再興され、かの浄瑠璃の近松門左衛門は久しく寺に寄宿したと伝えられる。

ずっと読んでいただきたいのですが、その真中あたりに、『鎌倉時代の文永・弘安の蒙古襲来の時、亀山、伏見院の二人の御幸があり、西大寺叡尊は院の勅命をうけ、千手観音の宝前において蒙古降伏祈祷を営み、祈願成就をなしえた。』とこうありますね。だから、このあたりの縁起が江戸時代に書かれた行実年譜の方に織り込んでいるのではないかと思うのです。この縁起が何に基づいて書かれたか、その辺までになりますとわからんのです。また後の考え方は、それぞれ皆さんの方で聞かせていただいたらと思います。とにかく教興寺は蒙古襲来の時に復興されたとなっています。だが、いろいろと資料を調べますと、ちょっと食い違うところがあるということですね。八尾の関係もたくさんありますので、教興寺はこれぐらいにしておきます。

次は泉福寺について申し上げたいと思います。先程の感身学正記の記事の、教興寺へ叡尊さんがこられた時の最初のところを見ますと、泉福寺から西大寺へ帰る途中、信貴坂で休んだ時に教興寺を見たと書いてあります。この泉福寺がどこにあったのかということですね。この『伝記集成』、これは奈良の国立文化財研究所でまとめられたのですけど、この本では河内の国高安の大竹にあると書いてあります。なぜ大竹かなと思って今の宗教法人名籍をくったら、確かにあります、泉福寺というお寺が。融通念仏宗なんですわ。ところが、あんまり古いお寺じゃないみたい

です。だから案外、この注釈をうった人は本を開いてさっとうたれたのとちがうかな。案外簡単な気持ちでね。だからどの程度信用していいのかなと疑問をもっているのです。

それでまた、いろいろ調べたら昨年の労働会館の郷土文化講座で、この八尾市の文化財室の米田さんという若い技師の人が言われたんですが、昔の中河内郡誌という本があるのです。あれは八尾で一番有名な常光寺というお寺の片岡さんが書かれた本です。その室町時期の縁起の中で泉福寺というのがでてくるのです。これによると、泉福寺は今の常光寺の近くらしいんです。このお寺としたらですよ。この常光寺という大きな禅宗のお寺は南北朝の頃からの将軍家と関係するお寺なんですけど、このお寺の縁起には、泉福寺、松風を西の後ろに聞くと、こういうように書いてあるのです。

常光寺縁起　亦泉福寺松風聞西後有耕畝耕田
鳥獣無渇喉、前有新泉新堂鐘磬下
断絶、南面花表辺一草堂安置地蔵菩薩
《応永六（一三九九）》

泉福寺というお寺があって、何か常光寺の西の後にあるように書いてあるんです。だから、泉福寺はどこかという一つの例として、このことが考えられるのです。常光寺の西の方にあったのですかね。

それからもう一つは、現在の穴太のところにお宮さんがありますね。穴太のお宮さんのところに昔、千眼寺というお寺がありました。米田さんがおっしゃるのは『宮町遺跡発掘調査概報Ⅰ（昭56）穴太神社境内廃千眼寺の調査』という二、三年前にやられた調査報告の後ろの方に米田さんが書いておられるんですけど、このお寺が僕らは千眼寺だとずっと思っていたんですが、河内鑑といって江戸時代の地誌の本にも千眼寺と書いてあるんですが、ところが村の方では千眼寺というのともうひとつ千福寺というようにも伝わっているというのですね。そして、つり鐘にも千福寺と書いてあるのです。字は「千」こっちの字です。先程の「せん」は「いずみ」でしたね。ちょっとここが違うんですけれども、八尾の常光寺から西の方ですから、なんか合いそうな感じもするわけです。そんなわけで、米田さんなんかは今の穴太の千眼寺跡、今の穴太神社のところです。あそこの辺が叡尊さんの時代の泉福寺じゃないかとそういう様に言われているのです。だから大竹も一つの意見です。又、千福寺だというのも一つの意見ですし、それから中河内郡誌に載っていた西郷というのも説ですし、いろいろ考えられるということです。

この場合、もし八尾近辺にあるとすれば都合がいいんです。みなさんの資料の「八尾の主な中世寺院」（図14）のところの地図へ古い道を入れておきましたけど、八尾駅のあたりにもし泉福寺をもってくれば、八尾の辺から庄の内の横の交差点を通って、ずっと刑部の北を通って教興寺へ通って行く。昔の信貴道ですね。これがうまく合うんです。そういう点では泉福寺ていうのは、大竹の

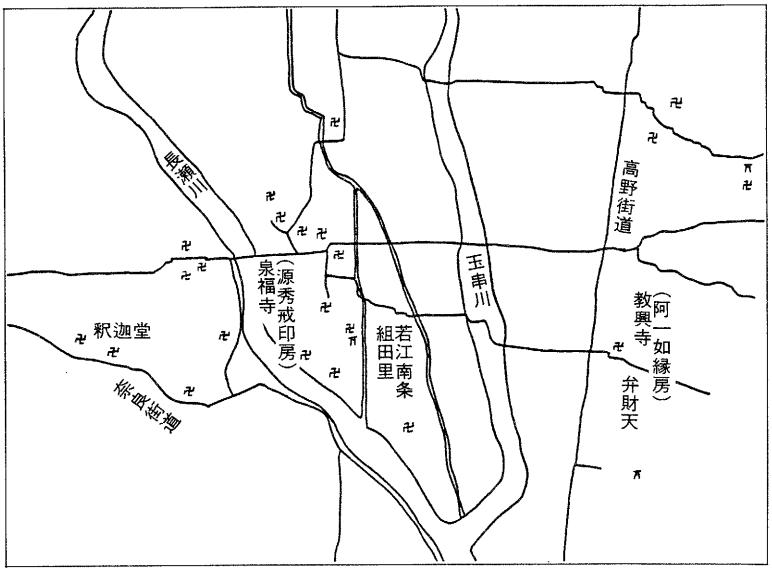


図14　八尾のおもな中世寺院

方にするよりも八尾の方へもってきた方がいいような感じもしてるわけです。これもひとつの考えですから…。

ところで、この泉福寺というお寺は案外大事なお寺だったんです。と言いますのは、この泉福寺というお寺にはここを開いた人、こののお守をしている人は戒印房源秀といいます。これは河内国の人です。この人がお守りをしているわけです。ところが、この人が西大寺の中のその当時ではなかなか重要な役割をしているのです。叡尊さんの一番古いお弟子さんなのです。そして、叡尊さんは一生の中で一回、鎌倉へ行かれるんです。一二五八年（弘長二）です。一二六二年に鎌倉へ行って、そして又、帰ってこられる

わけです。鎌倉の将軍家からぜひにと言われてね。自分のお弟子さんの忍性というお坊さんが鎌倉に来てるんです。そんな関係もあって、将軍家がものすごく尊敬され、何とか来て下さいと言われて、そしてむこうへ行くんですけど、その行く時の西大寺の留守番役が寺中第一位というのです。つまり西大寺の叡尊代理の役にこの源秀という人がなっているのです。だからこの人はものすごく叡尊にとって貴重な人なんです。先の表の下段の行実年譜のところに「弘長二年二月二日、泉福寺戒印秀律師（戒印房源秀）を監事とする。」と、だから留守番役にこの人をあてているわけです。ものすごく叡尊の信頼が厚かったんじゃないかと思います。

それから、その史料の一番最後のところですね。叡尊さんが死なれるのです。その死んだ後の記述、「正応三年八月二五日　嗣法上首」といったら、まあ西大寺叡尊さんの宗派を継いでいくえらいお寺のお坊さんの名前が掲がっているのです。その中の一番トップに掲がっているのが関東の極楽寺の忍性さん。まあこの人は当然ということですねえ。それからその次が般若寺の信空さん、三番目に泉福寺の源秀さん、そして、その後ちょっととばします。五番目に海龍王寺の人です。叡尊さんは西大寺におられるちょっと前に海龍王寺にもおられたんです。それからずっととばして一二番目に教興寺の阿一上人、一三番目に西琳寺のお坊さん、こうきてますから泉福寺はたいへん上なんです。だから源秀さんは叡尊さんに非常に近かったんですね。お寺の場所はひとまずおいても、源秀という人はなかなか注目すべき人ですねえ。まあ、だからお寺も注目しな

いといけないと思うんですが。とにかく、八尾の方になるか、大竹かどうかは別としても、八尾市域に間違いないと思い、そういう意味で泉福寺をひとつ掲げたんです。

叡尊さんが関係するお寺は八尾と教興寺と今の泉福寺ぐらいかといいますとそうじゃないんです。それだけ、この辺に布教されているからたくさんあるわけです。それをもう一回、叡尊さんの足跡年表（史料1）のところを見ていただき、ちょっと印を入れて下さい。八尾関係のところです。一二五二年、叡尊さん五二歳の時に河内の泉福寺で、それから一二六八年八月二八日のところで天王寺、住吉からの帰りに、河内国の亀井、ここの釈迦堂で説教されてます。それから、一二八五年八五歳の時に天王寺の別当になられて四月四日に教興寺に帰ってきます。それから、その下のところの弁財天、これが今の岩屋弁財天ですね。ですから結局、教興寺と泉福寺と亀井の釈迦堂のところ、これがこの感身学正記にでてくるところです。天王寺とか住吉へ行って帰り道にそういう所で説教なんかをされておるんです。

この亀井の釈迦堂というのは、これは故人となられた澤井先生の時代から言われていますが、今の真観寺の少し横の方に釈迦寺山という名前がついた土地があり、ちっちゃな五輪塔があるわけです。そこの場所です。ここから鎌倉時代の瓦が出ていると、その様に言われているところです。東亀井町ですが、まあ交通路になりますから布教していかれたんでしょう。

それから、これは西大寺の末寺（史料3）になっているお寺です。ここで見ますと上の西琳寺は羽曳野市

です。その次は教興寺、これは八尾市です。その次の丹南の真福寺、これは河内の南の方ですね。それから泉福寺、これも一応印をしましょうか。それから千光寺、東亀井の千光寺、これも印をしましょう。それから次の六辻西方寺、これも八尾ですね。印です。それからその下、八尾木の金剛蓮花寺、これも印して下さい。これみな西大寺の末寺ですね。

これ以外にももう一つ、これは証拠はあるんですが、今は全然違いますからどうかと思いますが、今の勝軍寺、太子堂の、あそこも一時は何か関係があった可能性があるんです。と言いますのは次の史料ですね。

（太子堂）

河内国神妙椋木ノ太子堂ト申テ、至末代之今有之律院ヤ。太子末代マテ報彼木恩事有口伝異説云依野原日野中寺又日大将勝軍寺也。

（聖徳太子伝記　東大寺本）

そこのところに「太子堂、河内国神妙椋木の太子堂と申してと、これ聖徳太子のお寺ですけれども、末代の今に至るまでこれら律院なり。」神妙椋木というのは聖徳太子の時代からみたら、今の末代まで残っている律院なりというんです。

河内国			
西琳寺	教興寺	真福寺（丹南）	泉福寺
寛弘寺（東條）	千光寺（東亀井）	西方寺（六辻）	金剛蓮花寺（八尾木）
薬林寺（金輪）	広成寺（丹上）	神弘寺（三箇）	宝泉寺（布忍）
宝蓮花寺（菅田奥院）			

史料3　西大寺末寺帳
明徳2年(1391)

律宗のお寺なんです。律院なりです。

これは野中寺のことか、大聖勝軍寺のどちらかです。まあ椋木だから大聖勝軍寺でしょう。だが、律院という記述がここしかないんです。だから何かちょっと関係ある。まあ叡尊さんは聖徳太子のことを信仰されておりますから、そんなことでひょっとしたら関係あるんでしょう。八尾市内で叡尊さんに関係のあるお寺はずいぶんたくさんあるんです。

それではもう一回、中世寺院の地図(図14)に丸をしてもらったらと思います。教興寺、それから泉福寺は大竹の方を丸してもらってもけっこうです。あるいは、こっちの真中、八尾の辺を丸してもらってもけっこうですねえ。それから、西方寺は八尾にあったというお寺ですけど、今で言えばそこの庄の内の交差点のところです。まあ、その辺のところへ一応書いてあるのですが、はっきりわかりませんから。それから釈迦堂は、亀井の釈迦堂、それから太子堂がここです。ずいぶんたくさん関係あるなあという感じですねえ。だから一時期、この八尾市域は相当叡尊さんの影響が大であったというように思われます。

もう一度西大寺(史料3)の末寺帳のところを見て下さい。これねえ、おしいですなあ。さっきの泉福寺ですが、ちゃんと地名を書いてあったらすぐわかりますのになあ。わざわざぬいてあるんですよ。ところが、なぜぬいてあるのかと考えたら、やっぱり有名すぎて書かなくてもよかったんでしょうな、おそらく。西琳寺にしても、教興寺にしてもそうですから、おそらくむこうのお寺とし

ては、別に書かなくてよかったんでしょう。それぐらい西大寺では名がとおっていた寺なんでしょう。そういうふうに僕は思うんですけどね。おしいですねえ、これ、だからあの当時、相当影響があったということは明らかです。

あとはちょっと細かいことになりますが、例えば、その西大寺の末寺の千光寺ですね。東亀井千光寺。これは先程の釈迦堂のことだと思えます。これは当然、そこの釈迦堂、現在の釈迦寺山から鎌倉時代の瓦が出ますので、これはまあ、どの人もまちがいないと言っておられますが、東亀井の千光寺、これは叡尊さんの書いた釈迦堂のことですね。

その次の八尾木の金剛蓮花寺、これも非常に有名なお寺です。これは今の八尾市の八尾木にあったお寺と言われています。ただし、場所は現在どこかというのはわかってないそうです。これもはやく考古学の方で発掘していただいたらわかりますかね。

吉野詣記　天文二二年（一五五三）

河内国八尾木の金剛蓮華寺といふ寺をさして行きつきにけり。…

ここなる人のいふやう、この八尾といふ所は鶯の名所なり。よのつねのは尾十二枚かさなれり。この所のは尾を八枚かさね、すぐわたるよし申しけり。…

これより神廟椋の木のある寺にまゐりて、かの木のもとををがみ、本堂へまゐり太子の御影開帳はなきよし語りしかど、案内しれる人、ひそかに申してひらきけり。

吉野詣記の天文二二年のところには京都の貴族の方が旅行された時、河内の国の八尾木の金剛蓮花寺という所に来られた。その時に、ここの人の言うことには、この八尾という所はうぐいすの名所です。世の常のうぐいすは尾っぽが一二枚ありますが、ここのは八枚重ねである。だから八尾と言うんですとこういうふうに言っている。それから神廟の方へ行かれるんです。だからこの八尾木の金剛蓮花寺、これはずい分有名で、戦国の時代にもまだあったんですねえ。今はどこへ行ったんでしょうか、わからんそうです。

次は六辻西方寺ですね。何て読むんでしょうか。一応、「ろっかつじ」と読ませてもらいますが、これと次の西方寺の資料を見て下さい。

西方寺

和歌山県有田市広利寺の十一面観音立像の胎内銘文

正平八年（一三五三）七月

河内国若江南条六辻郷の西方寺仏として、四天王寺大仏師の式部法眼頼円、弟の尾張頼基、子の駿河実円作る。

高地蔵

文明三年（一四七一）南無阿弥陀仏

八尾西方寺福舎院住、金剛仏子高範

小字

成法寺―六辻口　別宮―六辻口

最初の和歌山県有田市広利寺の十一面観音というのと、もうひとつ、その次の高地蔵（高嘉地蔵）、これは光明寺の門の所にある地蔵さんです。その地蔵さんが高地蔵というそうです。その地蔵さんに銘があって、文明三年（一四七一年）南無阿弥陀仏として、八尾西方寺福舎院住金剛仏子高範て書いているんです。ここに八尾西方寺がでてくるんです。だから西方寺は八尾にあったということがわかるわけです。それから、これと同じ西方寺のものが大阪府の歴史の資料に引用してあって、正平八年（一三五三）七月のこの十一面観音の胎内銘文に河内国若江南条六辻郷の西方寺仏として、この仏さんを四天王寺大仏師の式部法眼頼円と弟の尾張頼基、それから何か点々ですね。河内国若江南条六辻郷西方寺とでているんです。六辻というのは郷名でしょうね。一方では八尾西方寺とでているのです。だから六辻郷は八尾のことかとも思われます。今も小字に六辻口が残っています。ともかくこの八尾の西方寺も西大寺の末寺であったのです。

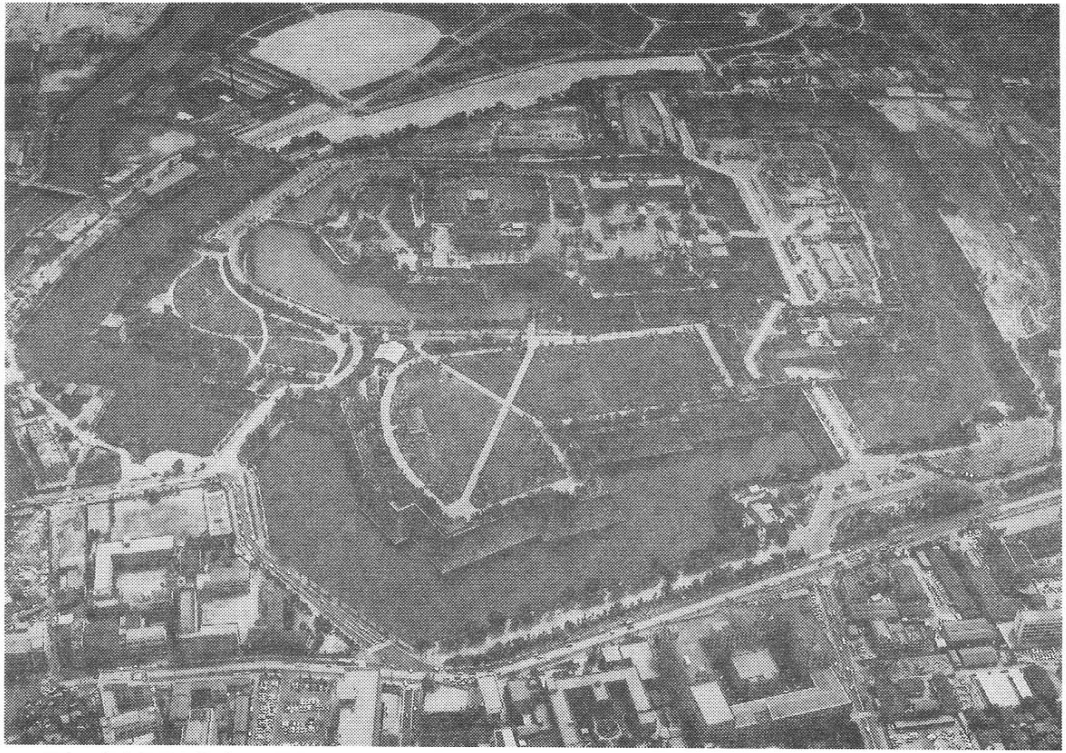
本日の話はこれで終らせていただきます。ありがとうございました。

昭和五九年一二月一五日

於　市立教育センター

大坂城と八尾

大阪経済法科大学教授
総合科学研究所所長
村川行弘



昭和44年大阪城全景（読売新聞社撮影）

ご紹介を受けました村川でございます。大阪経済法科大学という地元の大学に勤めております。八尾市とは古くからご縁がありまして、昭和三〇年頃の八尾市史の編集に関連して埋蔵文化財関係の調査や、心合山古墳・鏡塚の実測など考古学の分野でお手伝いをいたしましたが、現在は八尾市文化財調査研究会に関与して協力をさせていただいております。本日は、「大坂城と八尾」という話をいたすことになりましたが、本当は歴史学の分野のことになります。私は考古学を研究しておりますが、専門は弥生時代であります。まず、わずか四〇〇年程前の歴史学の分野の調査をすることになったかという経緯をお話ししておきましょう。

四天王寺の発掘

ちょうど、昭和三〇年から三三年まで、私は大阪の四天王寺の発掘調査に参画しておりました。四天王寺は昭和に入ってからでも、昭和九年の台風で倒れ、昭和二〇年の空襲で焼失するなどの被害を受けています。このため、今度はちょっとやそっとの災害ではびくともしない鉄筋コンクリートで、創建当初の様式に復元なさることになった。それには地下深く基礎を打たねばならない。そうなると地下の遺構が全部破壊されてしまう。その前に学術調査をしましょうということで、創建以来、何度建て替えられ、どのような規模で、どのような変遷をしてきたかを調べることになりました。私は五重塔跡・金堂跡・南大門跡を主担しましたが、層位順に掘り下げて、上町台地の地山までの建造物の変遷や遺構を検出しました。しかし、飛鳥時代の遺瓦が多量に検出されるのに、奈良時代前期の建造物より古い遺構が見つか

らない。どうやら四天王寺は飛鳥時代には上町台地の他の地域に創建され、なんらかの理由で奈良時代の初めに現在地に移築された。それも建物を解体し、瓦も一緒に運んで移築されたことを推定せざるを得ない状況でありました。四天王寺縁起でも他所より移転してきたことを記していますので、いったいどこに創建されたかを今後の研究課題として、宿題をもらったようなことでありました。その際、徳川幕府が再建工事をした石垣や礎石の若干に刻印が打ち込んであるのに気がつきました。石にしるしを打ち込んであるのですが、紋所でもないし、符丁でもないものがあり、工事関係者のなんらかの意志表示とは思いますが、これも宿題となっておりました。そういうことで刻印に少しばかり関心を持っていました時に、刻印と正面から取り組む機会が訪れてしまいました。それまでにも大阪城石垣には刻印がいっぱいあることは知っていましたが、友人達から「大阪城の刻印をついでににらめ」「いやいや、暇があったら調査することもあるけれども、今のところは四天王寺の刻印がどういう意味をもつか、それが分ったらいいのや」というようなことで積極的な気持ちは無かったのです。

大阪城外濠の水が無くなる

ところが、昭和三四年になりますと、大阪城の外濠の水が引いてしまい、部分的には濠底が見える状況となり、地盤沈下のせいじゃないか、工業用水の汲み上げのせいじゃないかなどの外野席の声がたかまりました。何といっても、外濠・内濠ともに水が満々とたたえられていてこそ、大阪城の景観が整うわけでございますから、

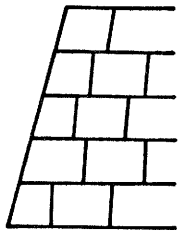
水が引いてしまった、えらいこっちゃというさわぎがおこってまいるのは当然であります。そこへ、こういう機会に石垣を調べたら都合がいいんじゃないだろうか、というような話が出てまいりました。何と言いましても、大阪城の濠は深うございますので、水が満々とたたえられていますと、石垣を充分に調べることはできません。底まで干上がっていると、これは絶好の機会ということになります。

大阪城総合学術調査

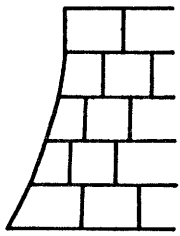
そんなことで大阪市が中心になり、大阪府・文部省・読売新聞社等が協力をして大阪城総合学術調査を実施しようということになりました。初めに申しましたとおり、これは四〇〇年程前の歴史時代の問題であり、歴史学の守備範囲になります。ところが当時においては、調査員という人手を抱えているのは考古学だけで、歴史家は机の上で研究するという時代でありました。そのようなことで、末永雅雄・岡本良一・魚澄惣五郎・有坂隆道先生らのご意向もあり、結局、石垣調査を担当することになったわけでございます。この当時は、芦屋市の会下山(えげのやま)遺跡という弥生時代中期と後期の山頂式高地性遺跡の発掘調査を担当しておりましたので、ここの調査員たちを動員したわけであります。大阪城石垣の調査をすることになったと申しますと、調査員たちは「見ただけでゾーッとするあの深い濠の石垣を調査するのですか。何十万個あるか分らない石垣を調べるのですか」など逃げ腰の発言ばかりでしたが、調査を断行すると決った時には、未知の問題に取り組む情熱をみなぎらせておりました。このよ

うな熱意のある協力者のおかげで大坂城の石垣と取り組むことができたのでした。

現存大阪城は輪郭式の平山城という分類に入ります。近世城郭は大名たちの政庁であり、居館であり、城塞でもありました。当然、その時代の文化の粋を尽した建造物が城内に建てられていたわけです。



註1



註2

石垣の調査

さて、大阪城総合学術調査(図15)では、私は大阪城の全石垣を調査対象としましたが、各壁面ごとに調査員を割り当て、各壁面の長さと深さ、石垣石の個数、石垣石の最大・最小・平均的大きさ（縦・横・奥行）の計測、刻印の種類と大きさと分布の特性、境刻線などの調査を主とし、刻印については拓本・実測・チョークを入れた写真撮影などを指示しました。この結果、大阪城石垣の壁面は二八三壁面、距離にして一一・二キロメートルあること、濠の深さは三〇～四〇メートルに及び、カーブをもった急傾斜石垣であること、石垣石は、縦・横各八〇センチメートル、奥行二メートルが標準であること、境刻線は七三本あることなどが判明しました。戦国時代の石垣は直線傾斜(註1)ですが、大阪城石垣は急カーブ(註2)をもつ石垣であるため、調査

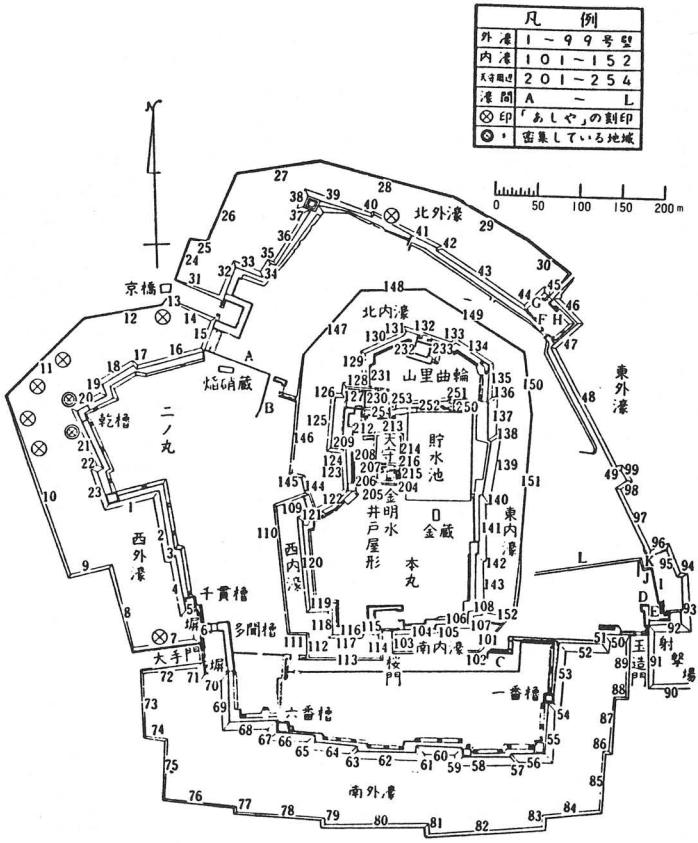


図15　大坂城の全域壁面図

写真28（読売新聞社撮影）

員たちは登るにつれて石垣がおおいかぶさってくるものですから、決死の状況（写真28）ではい上がりました。調査中を通じて、一人だけ石垣から水のある濠中に落ちることがありましたが、負傷は無く、他には事故が無くほっとしました。考古学の調査には絶えず危険がつきまといますので、調査担当者はこの点に大変苦労し、神経をすりへらす思いで調査を指揮しているのでございます。石垣石は一個の平均的重量は一・二八トンでして、総数は約一〇〇万個でございます。これは各壁面を調査した調査員からの報告を集計すると出てくるわけですが、濠の浅存水面下や土砂に埋もれている部分で若干の不正確がありますので、約一〇〇万個としておきます。但し、大阪城石垣の角石には六ツ目、七ツ目などの刻印があり、その下に五ツ目、四ツ目、三ツ目、二ツ目、一ツ目とあるわけですから、石垣の埋没個数を推定することは可能な状況にあります。境刻線は石垣丁場分担大名の構築区域を示す意味をもっています。

刻印

一二四七種

刻印（図16）は全部で一二四七種に分類されました。これは大名の家紋・相紋・家印・家臣の家紋や家印、石持（石工）の符号、大名や奉行衆の符号、文字（加肥後守・田筑後守・越前・京極丹後守など）、数字、採石地（あしや・くさか・小豆島など）があり、採石地で打たれたもの、丁場で打たれたものなどがありました。「☆」「⧖」「△」「×」など呪的護符的刻印もあり、「●」（写真29・30）の九曜星が九になったり、森美作守が「M」になったり、立花飛弾守が「ひ」になったり、あげは蝶の紋所が「ㅅ」となったりしていて、整理に苦労しましたが、最

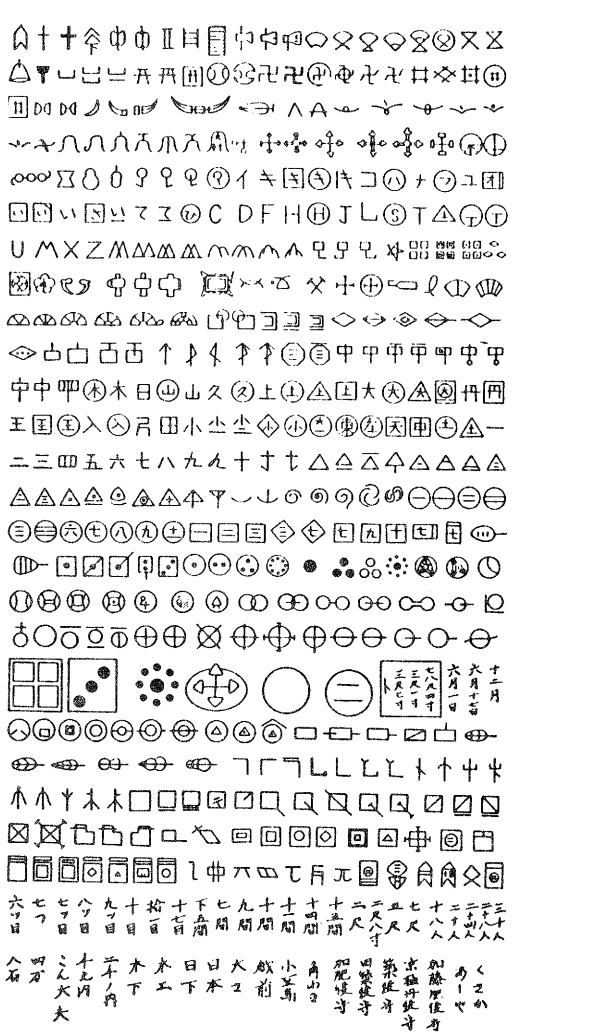


図16　刻印集成表

終的には一二四七種の刻印は六五家の大名に分類することができました。いわば、現存大阪城の石垣は六五家の大名によって構築されたことが判明したわけです。そして、石垣石の測定結果からは、個々の石垣は採石に当たって一定の基準と規格が与えられ、指示された大きさの石垣石を切り出しているということが分りました。手当たり次第に近辺の石を持ってくる状態では無かったということであります。

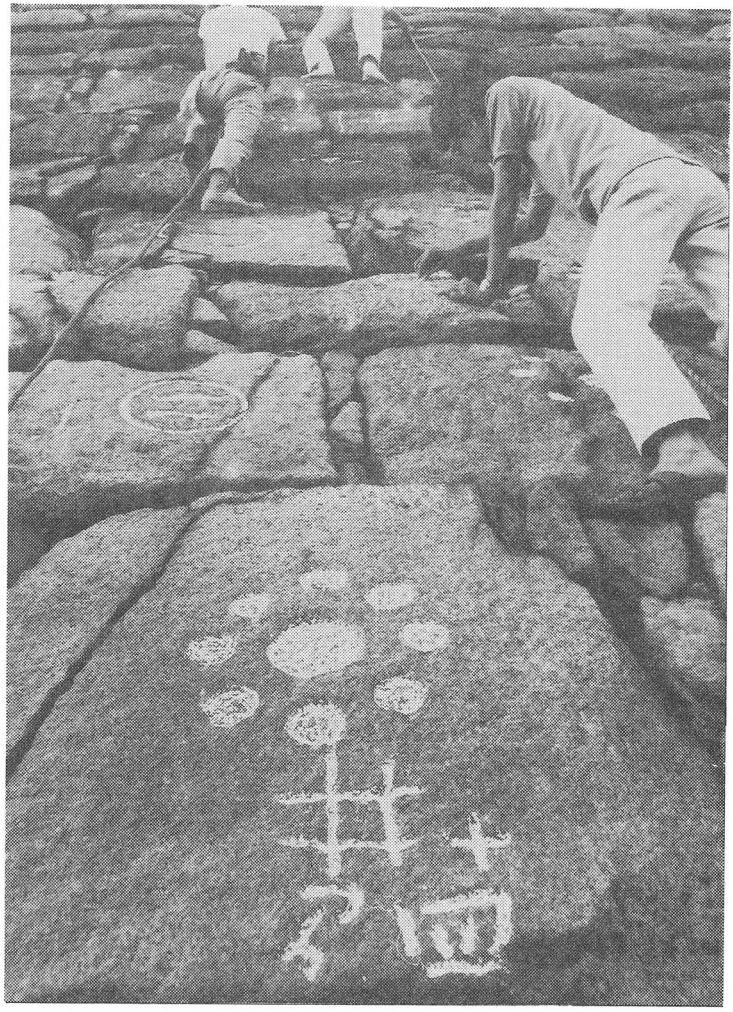


写真29（読売新聞社撮影）

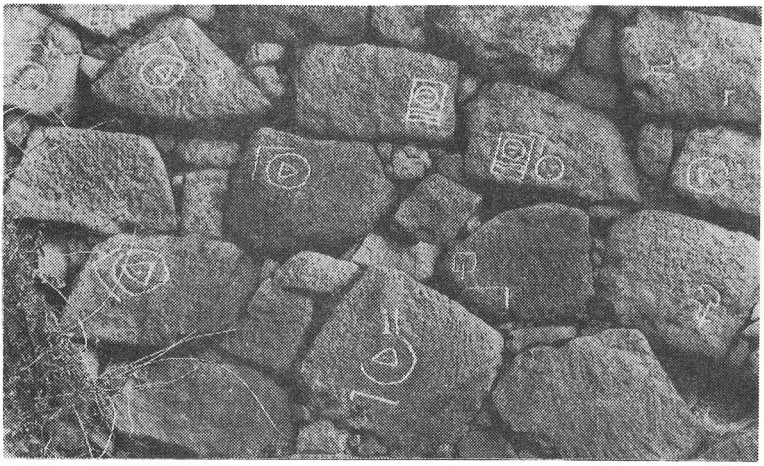


写真30（読売新聞社撮影）

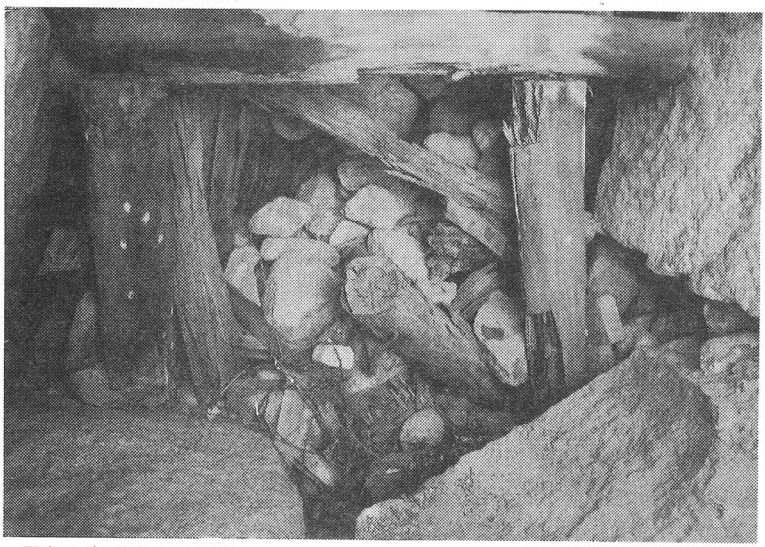


写真31（読売新聞社撮影）

採石地と運搬

採石地は芦屋・西宮が主であり、犬島・小豆島・生駒山の日下・飯盛山・笠置山・家島などが主要なもので、藤堂高虎は伏見城の石垣を再利用しております。採石地で、決められた大きさの石を切り出し、これを浜まで運び、船や筏で海上を輸送し、修羅車とコロで集石場に運び、検証を得た上で石垣丁場に運ばれ、穴太衆らによる石垣構築がおこなわれたわけです。他に裏込め石、盛土、縄張り、殿館、その他の造営という作業が控えております。一石を修羅車とコロで五分の一の力（三〇キログラムの力）で引いても四三人が必要ですから一〇〇万個の石には四三〇〇万人が必要となります。これは石垣石だけの労力ですから、たいへんな民衆が動員されたことになります。何といっても人口三〇〇〇万人の時代ですから、大阪に動員された人口はどのようなことでしたでしょうか。

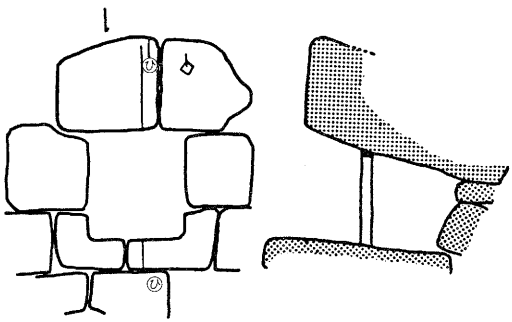


図17　抜穴の実測図
左は立面図で右は側面図。約118分の1に縮尺。

抜け穴

南外濠では抜け穴(図17)が一ヶ所発見されました。出口になるのでしょうか、石垣中程に花崗岩を細工して門状に造り出し、縦一メートル、横九五センチメートルの大きさで、坑道には径一〇センチメートルの坑木と

板材を用いていますが、二メートルほど入った所で落盤になっており崩れていました。(写真31) 方位からは西の丸に直線で向かっています。ただ崩れ残った坑木の一本に「大坂鎮台」と墨書してあるのが見つかりました。大阪府の前身の大坂鎮台か、第四師団の前身の大坂鎮台かは分りません。この抜け穴を造ったのは立花宗茂の丁場であります。井戸は金明水だけが調査の対象となりましたが、後代の継ぎ足し痕が明らかにされました。水をきれいにするために黄金を沈めてあると伝えられていますが、黄金は無く、金魚一匹と戦時中の鉄砲や武器が投げ込まれていました。

濠底の武器

このようなことは内濠、外濠でもいえることでして、水の引いた濠底には第四師団司令部が終戦時に投入した真管のついた弾薬・武器・鉄帽などが山積しておりました。調査員たちは、この状況を見て、この下層には慶応四年の徳川幕府大坂城が長州藩の攻撃をうけて炎上した際の遺物、さらにその下層には元和元年の大坂夏の陣による豊臣氏滅亡の際の遺物が投げ込まれて堆積しているはず、せっかくだから濠底をさらえましょうと言う。水の引いた濠内には一メートル近くもあると思われる鯉やナマズなどの魚が悠然としており、調査に協力してゴムボートをこいでくれている警察機動隊の人々が、取り上げて試食しようということがありました。ところが、併行しておこなわれていた水質調査担当の人たちから、この水は大阪一の汚水だと聞かされて、試食を断念するといったこともありました。同様にボーリング調査班も濠底を主にボーリング調査をしていました。私達にとっては、濠底のボーリング調査は、ヘドロ

がどのくらい堆積しているかを知る目安ともなり、石垣石の五ツ目・四ツ目・三ツ目などの埋没状況と併せて、濠底までの深さは重大関心事でありました。浅ければ調査員の要望に応じて、濠底発掘をおこない、豊臣大坂城落城の際の大判・小判他の遺物も回収しようというわけです。

濠底は石敷きか？

江戸時代の中頃に書かれた「金城聞見録」という書物がありまして、この中には、「大坂城の空濠の濠底は石畳にて敷きつめてある」ということが記されています。大坂城ほどの巨石を用いた石垣は、濠の両方の石垣の重圧があるので石を持ち送って濠底まで持ってこないと崩れてしまうという伝承もあり、濠底は石敷きと推定されていました。ところが、ボーリング担当の報告では、濠底一〇メートル下で、上町台地の地山になるということである。上町台地の上に一〇メートルの盛土をして、その上に三〇～四〇メートルの石垣を築いているというのである。上町台地は大阪で一番高い所である。その上に盛土をするとなると、他所より土を運んで来なければならない。こんな変な城は聞いたことがない。少なくとも現存大阪城北辺部は五〇メートルの盛土をしていることになる。石垣刻印に見られた六五家の大名達は徳川幕府の下での西国、北陸の大名が主となっており、豊臣秀吉の家来がおらない。ここに種々の調査中に知り得た疑問点を整理してみる必要がおこってきた。

田筑後守

まず、外濠南端にみられる「田筑後守・小豆島」の刻印である。田筑後守は久留米三二万石の田中筑後守忠政のことでありますが、この人は慶長五年までは兵部少輔

であり、慶長五年の関ヶ原の戦での戦功で、久留米三二万石の大守となり、筑後守を称した人であります。そして元和七年には家名断絶となっている。従って、田中筑後守という名が存在したのは慶長五年から元和七年までの時期である。ご存知のように豊臣秀吉が大坂城を築城したのは天正一一年で、秀吉が亡くなったのは慶長三年であります。秀吉の亡くなったあとに存在した人物が、豊臣秀吉の大坂城を造るということは有り得ないことである。

九州大名が内濠をつくる

また、内濠には九州大名の立花宗茂「㋑」、大村純頼「[illegible]」、島津忠興「⊕」などの丁場がみられる。大坂冬の陣の講和では、外濠が埋め立てられた記録はあるが、内濠まで埋め立てられたという記録はない。豊臣秀吉が九州大名を支配下に入れたのは天正一五年の九州征定の時であり、既に豊臣大坂城はできてしまっている。それなのに本丸のある内濠を九州大名が構築しているのはどういうことであるか。

本丸の発掘

このような調査中の疑問は、本丸内での発掘調査をおこなうことによって、実証資料によって、理解を可能とするようになった。本丸の中央部で七・三三メートル下に「野づら積」の石垣が検出され、ちょうど石垣の南西隅のコーナー部で石積を七段まで検出できたのである。この石垣上には一〇センチメートルのひどい焼け層があり、この中に金箔瓦片、天龍寺青磁（一六世紀の竜泉窯磁器）などの破片が遺存していました。もちろん、当時の日本では二メートル以上の深さの発掘技術は無く、盛土であることが分っているため、土砂崩れを警戒

して、径三メートルの鉄骨枠を組んで、井戸掘りのようにして鉄骨枠を沈めながら、幸運にも石垣列を発見したということであります。本丸内の石垣は、その後、昭和四四年のタイムカプセル納入の際にも、地表下二五～二九メートルのところで発見されております。どうやら現存大阪城の下にもう一つの城が埋まっているということが分ってきたわけであります。

私も子どもの時分から、何度となく祖父母や父母に連れられて大阪城見物に参っております。その度ごとに、祖父母や父母は、「これが太閤さんの大阪城や」と戦国時代の話をしてくれました。可愛いい孫や子にウソを教える祖父母や父母はおりません。当然、成人し、研究者となっても、大阪城は豊臣秀吉の城、太閤さんの城と決めておりました。また、大阪城大手門の案内札をはじめ、パンフレットなどすべて、豊臣秀吉の大阪城、加藤清正が小豆島から巨石を運んで来たというようなことが書いてありました。ところが石垣刻印を主とした石垣調査からは、不審なことばかりが出てまいりました。改めて文献資料を検討する必要が出来てまいったわけであります。

法円坂

大阪城に直接関係する文献資料は明応五年（一四九六）本願寺八世の蓮如が石山坊舎を建立した記事で、久宝寺の慈願寺文書によりますと、蓮如と久宝寺の法円は親交があったらしく、現在も大阪城の近くに法円坂という名がみられるのは、法円が久宝寺の人々を連れて石山御坊建設に協力した名残りを止めているのかも分りません。これは、故澤井浩三先生のお説でもあります。

安井氏

久宝寺の土豪安井氏は畠山家国の子孫と称し、渋川郷の領主であり、やがて久宝寺城主となります。間もなく播磨国安井郷の領主となり、応仁の乱の頃、安井定継の時に再び久宝寺城主に戻り、安井定重、定正兄弟は織田信長に仕えました。この頃、安井氏は法円を保護し久宝寺寺内町を形成させたといいます。やがて石山合戦、一向一揆のため天正五年に久宝寺城は落城します。末弟安井定次は信長より一三五石を請所として与えられますが、定次は羽柴秀吉と密接な関係をもったらしく、定次の子、安井市右衛門成安（道頓と号す）は大坂城築城の功で城南の地を秀吉から賜り、定正の子治兵衛、九兵衛（道トと号す）は親族の平野藤治と高津川から流下する梅津川を改修し、東横掘川から木津川に至る二〇余町の南掘川を掘ることとなり、慶長一七年に着工し、元和元年に完成させます。この工役には久宝寺の農民が参加したといい、この間の慶長・元和の大坂冬の陣・夏の陣では道頓は大坂方に参戦して戦死したため、大坂城代になった松平忠明が功を顕彰するため道頓掘川と名付けたというのが、久宝寺安井家の由緒であります。どのような戦功で秀吉から城南の地を賜ったかは分りません。この安井家からは、江戸時代に貞享暦を作った安井算哲が出ていまして、渋川郷の領主の家筋ということで渋川春海と号しております。

成安氏

これに対し、平野の名家に成安道頓があります。久宝寺の安井治兵衛、九兵衛と東末吉家の当主の兄平野藤次郎とで道頓掘川を開いたと伝えます。工期は慶長一七年から

元和二年までで、この間に成安道頓は大坂の陣で豊臣方に味方して戦死をしたので、成安道頓顕彰のため道頓堀川の名が付けられたといいます。

現在では、どちらが正しいかわかりませんが、安井道頓と成安道頓がミックスされている状況です。

天文法華の乱

天文二年（一五三三）細川晴元・六角定頼・法華宗による山科本願寺焼打ちがあり、一〇世証如は石山御坊に移り、方八町の石山城を主軸に五一の支城をもつ大寺内町をつくり、一向宗（浄土真宗）の本拠とします。これが石山本願寺城で戦国大名と対抗しうる戦闘城塞であります。当時の一向宗は戦国大名と同じで、宗教的に団結した戦闘集団でありました。

石山合戦

元亀元年（一五七〇）―天正八年（一五八〇）の石山合戦の結果、一〇年にわたる織田信長の攻撃にビクともしない名城ぶりを発揮しますが、悲鳴をあげた織田信長は朝廷に斡旋を依頼します。朝廷の斡旋によって一一世顕如・一二世教如は石山本願寺城を退去して紀州に移ります。ようやく念願の日本一の境地を手に入れた織田信長は城番として池田恒興、元助父子を配します。大坂を全国征覇の拠点とする考えがあってのことと思います。信長公記には信長の大坂に対する強い欲求と評価が記されています。

しかし、二年後の天正一〇年（一五八二）六月二日、信長は本能寺の変で、嫡子信忠は二条城で明智光秀のために滅ぼされます。備中高松城攻囲中の羽柴秀吉は急ぎ戻り、山崎の戦で明智光秀を討ち、続いて清洲会議の主導権を握って、信忠の嫡子秀信を織田家の後継者と決定し、自らは秀信の後見人となります。これは滝川・柴田ら織田家の老臣にとっては苦々しいことであったらしく、天正一一年（一五八三）賤ヶ岳の戦、続いて越前北の庄の戦と展開し、四月二三日に柴田勝家は滅びます。この賤ヶ岳の戦で加藤清正・加藤嘉明・福島正則・脇坂安治・片桐且元ら小姓達が講談でいう賤ヶ岳の七本槍という戦功をあげ、秀吉から侍に取り立てられた逸話は有名であります。

羽柴秀吉の活動

秀吉の大坂城

秀吉は五月二五日に池田父子から石山本願寺城を譲られると、池田父子を大垣城・岐阜城に配し、八月二八日に大坂城（石山本願寺城）天守の着工を命じ、三〇余国の大名に大坂城石材採取運搬に関する条規を下付しております。この間の六月二日に、本能寺の変から一年目ですが、秀吉は大坂城に入り、間もなく堺の豪商らを招いて茶会を催したりしております。秀吉の大坂城は三年余で完成しますが、ルイス・クロイスはじめキリスト教宣教師の報告文（邪蘇会士通信）でも豪荘華麗なものであったことが記されています。やがて、秀吉は無謀な文禄・慶長の役をおこし、戦中の慶長三年（一五九八）伏見城で病没します。二年後の慶長五年の関ヶ原の戦で天下の形勢は徳川家康の支配体制となったわけですが、慶長一九年（一

六一四）の大坂冬の陣、元和元年（一六一五）の大坂夏の陣で五月八日をもって豊臣秀頼は滅亡します。この大坂両陣とも八尾市域が戦端の地となり主戦場となっています。五月九日松平忠明が一〇万石の封地を与えられて大坂城主となります。間もなく松平忠明は大坂城を去り、大坂城は徳川氏直轄となります。

徳川築城

元和五年、二代将軍秀忠が藤堂高虎に大坂城修築を下命します。この結果、元和六年（一六二〇）から寛永五年（一六二八）に至る徳川幕府による一（元和六）・二（寛永一）・三（寛永五）回の工役が西国、北陸三〇余ヶ国の大名に下命され、寛永六年に修築工事は完成しました。尼崎藩主戸田氏鉄は三回とも奉行をつとめました。以上が文献資料にみえる大坂城築城関係記録であります。

秀吉が大坂城を手に入れたのは天正一一年で、それまでの秀吉は戦の連続で、新城を作っている暇も金もありません。当然、織田信長が一〇年攻めても陥せなかった名城石山本願寺城を修築し、桃山文化の粋を尽した華麗な建造物を造営したのが秀吉の大坂城と考えられます。

小豆島の石は徳川大坂城

しかし、加藤清正が小豆島へ石を切り出しに行くのはちょっと難しいと思います。瀬戸内海の航行権を秀吉が手中にしたのは天正一四年の四国の長曽我部元親攻略後であります。まして賤ヶ岳七本槍直後の加藤清正が航行権もないのに、採石に行けるはずはありません。しかし、小豆島には豊臣秀吉文書と称する古文書が多くあり、

加藤清正や加藤嘉明宛に石材の切り出しを督促しております。これらは、江戸幕府の修築工事での石材切り出しと混同した偽文書であります。その後遺症は昨年の大阪城四〇〇年祭に際し、小豆島の青年会議所の方々が、秀吉の大坂城に運ぶべく切り出された石が小豆島に沢山残されている。せめて、若干でも大阪城に運んであげよう、ということで、筏を組んだりして鳴物入りで大阪城天守閣まで搬入されましたが、これは徳川工役による採石の残石で、秀吉の大坂城とは全く関係のないことなのであります。

どうやら謎が解けてまいりましたので整理をいたしましょう。豊臣秀吉の入った大坂城は石山本願寺城の焼け跡であり、石垣を再利用しながら更に補強して、その上に桃山文化の粋をつくした殿館を建てた。しかし戦国以来の世であるため、石垣石は手当たり次第に採取運搬させている。実は最近、大阪城内の貯水池南側で、豊臣時代の石垣が発見されまして、これは石臼、つけもの石、墓石、竜山石の石棺、巨大礎石など手当たり次第に積んでおります。石棺は上町台地の古墳から、礎石は織田信長に焼かれた四天王寺や、廃墟の難波宮跡など上町台地の各地から採取したものと思います。まだまだ規格品の石を切り出さす状況では無かったようです。しかし、石山本願寺城よりは更に強固な城郭になったのは事実だと思います。そのためにこそ、徳川家康は大坂城の攻略を必要としました。大坂冬の陣の講和条件で外濠を埋め、やっと大坂城攻略のめどがたったわけです。大坂夏の陣で豊臣氏を滅ぼした徳川家康は、城内遺存の金銀を全て回収しました

が、秀吉の第二の本拠伏見城を破壊しております。また、秀吉が朝廷から戴いていた正一位・豊国大明神の神号を取り上げております。ついで秀吉の墓である京都の豊国廟を火薬で爆破しようとしますが、これは秀吉の妻「おね」の陳情で一部破壊で断念します。このようなことを次々とやった徳川家康が豊臣秀吉の本拠大坂城をそのままにしておくはずがない。西国、北陸三〇余ヶ国の大名に命じて、秀吉の大坂城を根こそぎ破壊し埋立てさせてしまう。現存大阪城の盛土はこのようにして出来たものであります。北辺部に厚く、南辺部では一メートル程で上町台地の地山になるところもあって、薄い状況です。豊臣大坂城を埋め立てて、ほっとした大名達に今度は、その上に更に大きな新城を造れという命令が出る。しかも石垣の石材は種々の用途に応じた規格寸法が指示される。六五家の西国、北陸の大名達は必死になって採石場探しをする。総奉行の戸田左門氏鉄は所領の六甲山系の石山を諸大名に解放する。大半の大名が六甲山系の芦屋、西宮地域に殺到して採石場所を確保する。現在も芦屋市のゴロゴロ岳を代表として阪神間の各地に採石場の跡がのこされているが、このおかげで芦屋、西宮の人達は山を荒された結果、谷崎潤一郎の「細雪」にあるような山津波の災厄に泣いてきたのであります。一方、総奉行として、採石地提供者としての戸田氏鉄は大垣一〇万石に加封されて移転します。このようなのを「一将功成り万骨枯る」というのでしょうか。三回にわたる徳川幕府の大坂城修築は補修工事と考えておりましたが、現存大阪城の何処にも豊臣時代の遺構は無く、石垣も全て巨石で根底から積上げられてお

り、中途で補充したような箇所は見当たりませんでした。石垣に関しては豊臣時代の痕跡は全く無いということでありました。徳川幕府の修築工事は、実は新築工事であったわけであります。そのために外濠の南西隅に田筑後守・小豆島というような刻印が見つかることになったのです。これは元和六年の第一回工役における田中忠政の丁場で、工役完成とともに田中忠政は断絶処分を受けています。大手門には「◎」の紋所や加肥後守の刻印があります。これは加藤清正の息子の加藤忠広の丁場でして、加藤忠広は寛永五年の第三回工役を完了した直後に、肥後熊本七二万石を改易処分になっております。家老の下河善兵衛が浪人して尼崎藩に仕え、そこで生れた息子が国学の開祖となる契沖であります。抜け穴のあった立花宗茂の丁場も寛永五年の第三回工役によるものであります。九州大名の刻印のみられた内濠石垣は寛永元年の第二回工役のものでした。当然、大阪城本丸の地表下約八メートルで検出された「野づら積」の石垣と焼け層は豊臣大坂城の一部と落城に伴う火災痕であります。この石垣は石山本願寺城の時代以来のものと考えられます。大阪城石垣を調査しまして、豊臣秀吉という関白・太政大臣にまでなった実在の人物の履歴を完全に抹殺した徳川幕府の統制力の物凄さ、豊臣氏滅亡後、秀吉の本拠で示した大坂城新築という厳命ときびしい統制、もはや、信長・秀吉の時代の権力とは重さが異なる恐しさを感じました。同時に城郭を必要とした時代に生きた人々が果して幸福であっただろうか、支配者も被支配者も含めて、もう一度改めて城を必要とした時代と現代を比較し、現代に生きるありがたさをか

みしめる必要を感じました。権力の座のむなしさ、はかなさをも思い知らされたものです。

調査は昭和四四年にもおこない、同時に各大名の採石地の大半を把握しました。しかし、秀吉の大坂城の旧状はこれからが調査・研究の本番というところであります。またマスコミによって、現存大阪城は豊臣秀吉の城ではなく徳川幕府が築造したものであると報道されました時には、数千通の投書が届き、「誰が何と言っても大阪城は太閤さんの城である。これにケチをつける奴は死んでしまえ」と大変なおしかりを受けたものです。改めて、豊臣秀吉という小人物が、どれ程の功績を大阪市民のため、日本国民のために残したのかを調べてやろうという気になりました。恐ろしいのは、講談や小説の内容を歴史事実と誤認する風潮ではないでしょうか。また、僅か四〇〇年程前のことでありながら、調べ直してみると全く定説とは異っていたという事実に遭遇し、実証の重要性を改めて認識した次第であります。

本日は欲深く、さらに「動乱と八尾市域」ということで、日本歴史の主要事件には絶えず八尾市域が関与している歴史事実にも触れたいと考えております。若干例を紹介しましょう。

物部一族

旧事本紀の天神本紀に饒速日命の河内国哮峯への降臨説話があります。

饒速日尊、天神の御祖の詔を禀け、天磐船に乗りて、河内国の哮峯に天降り坐し、則ち大倭国の鳥見の白庭山に遷り坐す。いわゆる天磐船に乗りて、大虚空を翔行り、この郷を巡り睨りて天降り坐す。すなわち虚空見つ日本国というは是か。

とあって、物部氏の祖神饒速日命が河内の哮峯に先づ降臨し、やがて大倭国の鳥見（現在の大和郡山市）に移ったという説話である。住吉大社神代記に結界を示す条があり、

生駒山の饒速日山…

という記事がある。どうも哮峯というのは饒速日山とも呼ばれたらしく、本学の鳥越憲三郎教授は高安山と推定しておられますが、河内の最初の開発者は物部一族という説話であります。

次に日本書紀の神武記に、神武東遷説話があります。

塩土老翁に聞きしに、東に美地あり、青山四に周れり。その中に天磐船に乗りて飛び降れる者ありといえり、余おもうに、彼の地は必ず以て天業を恢め弘べて、天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。その飛び降れる者は、おもうにこれ饒速日をいうか。何ぞ就いて都らざらんや。

とあって、東の方に天下を支配するための中心となる地があり、そこには既に饒速日命一族が住んで統治していることをいっている。鳥越憲三郎教授は、この物部一族を物部王朝と名付け、邪馬台国に擬し、金剛・葛城山麓の葛城一族を葛城王朝と名付けて狗奴国に擬しておられます。八尾市域を中心とした河内の政治的重要性を示す考察であります。

河内馬飼首

日本書紀継体紀には、継体天皇即位の伝承が記されています。大意は、

男大迹王が五七歳の時、小泊瀬天皇（武烈）が亡くなった。五〇七年の正月、

大伴金村は物部麁鹿火大連・巨勢男人大臣らと議し、越前国三国（福井県坂井郡三国町）にいる誉田天皇（応神）五世の孫、男大迹王を迎えることにした。王は、はじめ、これを容易に聞き入れなかったが、知人の河内馬飼首荒籠の尽力により、ようやく承諾し、二月四日に樟葉宮で即位する。継体天皇五年（五一一）一〇月、樟葉から山背の筒城（京都府綴喜郡田辺町）に遷り、七年後の一二年三月に弟国（京都府乙訓郡）に遷り、八年間滞在し、即位後二〇年にして大和に入り、桜井市の磐余玉穂宮で政治をした。

とある。河内が継体天皇の即位の地であること、即位に際して河内馬飼首荒籠がかかわっていることが記されています。生駒山の名のとおり、生駒山麓では軍馬が飼われていたのですが、その馬飼首荒籠の助言で継体天皇（男大迹王）が即位に踏み切ったというわけです。

河内の巨大古墳

次に考古学上の資料で四～五世紀の河内を眺めてみますと、巨大前方後円墳造築の時期にあたります。外国の記事では、高句麗好太王（広開土王）碑文にみられる倭と高句麗の戦争、宋書などにみられる倭の五王遣使の時期であります。この時期に河内には百舌鳥古墳群と古市古墳群を代表とする巨大古墳群が出現します。エジプト最大のクフ王ピラミッドや中国最大の秦始皇帝陵をしのぐ世界一の巨大古墳である仁徳天皇陵古墳（大山古墳）がその代表例であります。このような巨大古墳の造営は、支配者の強大な権力・統制力・富がなければ実現できません。日本の巨大古墳を一〇位まであげてみましょう。

一、仁徳天皇陵古墳　（河内）　四八六メートル
二、応神天皇陵古墳　（河内）　四三〇メートル
三、履中天皇陵古墳　（河内）　三六五メートル
四、造山古墳　（吉備）　三五〇メートル
五、河内大塚古墳　（河内）　三三〇メートル
六、見瀬丸山古墳　（大和）　三一八メートル
七、景行天皇陵古墳　（大和）　三一〇メートル
八、にさんざい古墳　（河内）　二九〇メートル
九、応神天皇皇后仲津媛陵古墳（河内）　二八六メートル
一〇、うわなべ古墳　（大和）　二八〇メートル

以上のように、日本の一〇大巨墳のうち、六基までが河内にあります。しかも、このような巨大古墳が多量に集中して遺存しているのも河内だけであります。これは河内王朝というような単なる地方王権の首長墓ではありません。発掘された遺物からみても、最新式の武器と甲冑が出土するのは、淀川沿いの地域と大阪湾沿岸の地域で、五世紀の戦闘用武具の最新タイプが備わっています。このような事例は全国的にも他にありません。大和では古いタイプと新しいタイプが併せ持たれており、僅かに新沢千塚古墳群だけが特別最新式の武具を持っている程度であります。少

くとも五世紀の河内国は日本を代表する戦闘集団の本拠地であったことは認めざるを得ません。高句麗との戦争や倭の五王の比定と河内国が無関係ではないという考察が生まれてくるわけです。しかし、これらの問題は、なお今後の検討を必要とすると思います。むしろ、日本の国家形成期と河内の関係を重視する必要があろうかと考えております。

三野県主

一方、八尾市域の楽音寺には西の山古墳・花岡山古墳、大竹には向山古墳があり、何れも古墳時代前期四世紀の前方後円墳であります。また大竹の心合寺山古墳、これは生駒山西麓最大規模の美しい前方後円墳でありますが、中期五世紀のものでありまして、同時期のものには中の谷古墳、鏡塚古塚があります。地元では、これらの古墳は三野県主小根を中心とする地域首長墓と推定されております。日本書紀清寧条には、この三野県主が吉備雅媛・星川皇子の反乱に関与した記事が載っています。事件の概要を申しますと、

吉備上道臣田狭が妻の吉備雅媛の美貌を自慢したのを聞いた雄略天皇が、この雅媛を奪うため、田狭を任那の国司に任じ、その留守中に雅媛を奪って二人の皇子を産ませた。任那でこのことを知った田狭は怒って反乱を計画した。雄略天皇は田狭と雅媛の子弟君を派遣して圧えようとしたが弟君が父と合意したため妻に殺された。雄略天皇が亡くなると、吉備雅媛はせめて自分の子、星川皇子を皇位につけようと考え、星川皇子・磐城皇子・城丘前来目らと大蔵司を占領し、三野県主小根らの支援をうけて反乱をおこした。しかし、大伴大連室屋・東漢直掬のため

大蔵司を囲まれて焼き殺された。この際、吉備上道臣は吉備水軍四〇隻を支援のため派遣したが、既に乱は治定されていたため引き揚げた。三野県主小根は大伴氏に泣きついて助命された。吉備上道臣は所領の鉄山である山部を奪われた。

というものであります。中央朝廷と吉備の対立ということも重要ですが、吉備雅媛の反乱を支援した河内の豪族があったことも重要でありまして、三～四世紀の八尾市域の遺跡からは吉備の土器が豊富に出土しますのも、河内国と吉備国が無関係では無かったことを示す資料かと思うわけであります。私は楽音寺地域の前方後円墳は紀・記の三輪王朝に対抗した河内青玉（あおたま）の一族の時期とみております。

そのほか、日本の代表的豪族である物部氏は河内国渋川郡を本貫とし、中臣氏は河内国河内郡を本貫としていること、物部氏と蘇我氏の対立は朝廷勢力を二分するぐらいの対立であったわけですが、五八七年の物部守屋の滅亡で、蘇我氏の専権が実現することになります。市域が戦場になり聖徳太子らが物部氏と激闘をしたわけです。この時期になりますと皆様方のほうが、むしろ熟知されている歴史事実でありますので、以下主要な日本歴史上の重大事件と八尾市域とのかかわりあいを箇条で示しておきましょう。

○渡来人・渡来系氏族の活躍の舞台であること

六六七年に高安城が竣工し、唐・新羅に対する最後の拠点となったこと、この高安城は六七二

年の壬申の乱でも大友皇子軍が拠り攻防戦を展開したこと、大宝一年（七〇一）に廃棄されてその使命をおわったこと

○京道・京街道と呼ばれる東高野街道の歴史と南北朝争乱の主要舞台となったこと

河内守護の所在地であったため、応仁の乱、それに続く戦国争乱の舞台となり、市域の大半が戦火に巻き込まれたこと

○池田丹後守教正のキリスト教普及に代表される河内キリシタンの動向

大坂冬の陣・夏の陣を通じて戦端の開始された地域であり、長曽我部盛親や木村重成、藤堂高虎や井伊直孝、さらに徳川家康・秀忠父子の激戦場であったこと

以上のように数えあげれば、歴史の各時代を通じて主要な事件に河内地域がかかわっております。八尾市域・河内国の歴史は日本歴史の縮図ともいえるわけであります。もう一度郷土の歴史を見直し、かみしめて戴いてはいかがかと思うわけであります。現在は、八尾市文化財調査研究会がありまして、市域の貴重な埋蔵文化財を明らかにいたしており、実証によって八尾市域の豊富な歴史事象を解明しております。今後ともご理解とご協力を賜わりたいと存じます。

最後に福沢諭吉の論説をご紹介したいと思います。

一八九七年六月に明治政府は「古社寺保存法」を公布いたしました。これに対して、福沢諭吉は一八九七年七月一六日に、自分の主宰する時事新報で「古物保存の要不要」と題して反対をし

たわけであります。

…今、国家の公より見るときは、古物の如き、断じて眼中に置く可らず。国家の常に認む可き所のものは社会の安寧と人民の繁栄とのみ。即ち殖産興業を勉めて富強の実を謀るの一事こそ実に国家の目的にして、此目的の為めとあらば如何なる労費も吝しむ可らずと雖も、古物の如き、幾千万の数を蓄ふるも国の富強には一毫の益あるにあらず。例へば国に何十隻の軍艦、何十万の兵隊、何百万馬力の蒸気ありと云へば、即ち富強の実を現はして自ら重きを成すに反し、彼の南朝四百八十寺の数は曽て是れ亡国の名残を留めたるに過ぎず、比一点より見れば、古社寺古物の如き、無用の長物にこそあれ、強ひてえを毀たざるまでも断じて保存の必要なしと知るし。

これが論説の内容であります。明治政府は一八七一年（明治四年）五月に「古器物保護令」を公布し、一八九七年（明治三〇年）六月に「古社寺保存法」を公布して、文化財保護の施策を確立し、その延長線上に現在の「文化財保護法」が成立しているわけであります。明治政府の役人達は、政府以外の民間の大反対を押し切って、「古器物保護令」「古社寺保存法」を出して来たわけでございます。現代は、民間で、「これを残しなさい。これを保存しなさい。」とわいわい言って、遅ればせながら、行政が後手・後手に廻って対応の手を打っている。明治の時代は、一〇〇年の計のもとに、行政が先頭にたって、民衆よりもはるかな先頭にたって責任を果していた

ということであります。福沢諭吉は自分の主宰する時事新報で、富国強兵・殖産興業のお題目を唱えて反対しているわけですが、国家一〇〇年の計に立脚したものではなく、目先だけの近視眼的見解と理解でありまして、指導者意識だけが先行している論説であります。この程度の人物が言論をもって社会をリードしていたということになります。現在においても、ややもすると、埋蔵文化財発掘調査の報道を、まるで事件のように取り扱っているのをみることがあります。浅薄な知識で解説がなされている記事も散見できます。福沢諭吉に限らず、マスコミ関係者の特に留意すべきことは、その影響する度合を充分に承知して、責任のもてる論考・論説をなすべきで、オポチュニスト的発想は戒しむべきことでありましょう。一万円札にも登場し、若い人たちから最も尊敬されている人物でありますので、このような論説を紹介した次第であります。人さまを尊敬する場合には、よく調査・研究して尊敬する必要があります。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり」だけの理由では、一寸おそまつのそしりを免れません。

話が、かなり脱線をいたしましたが、与えられた時間も迫ってまいりました。多勢の方々のご参加を感謝して、話を終わらせていただきます。

昭和六〇年三月三〇日

於　市立労働会館

あとがき

昭和五八年に第一回文化財講座を開催してから、今年度までに計一三回、八尾という地をさまざまな角度から取り上げて、諸先生方にご講演をいただきました。

今回、そのうち四つの講演内容を本書に掲載する運びとなりました。ご講演いただいた時の雰囲気を壊さぬように話し言葉でまとめているため、読みづらい点もあるかと思いますが、講座の熱気が伝わればと思います。

今後、今回掲載できなかった講演についても、まとまり次第、記録集として刊行する予定であります。

本書の作成にあたり、ご講演いただいた先生方には資料の提供等、多大なご援助をいただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

昭和六二年三月

（財）八尾市文化財調査研究会報告12

八尾あれこれ
文化財講座記録集 1

発　行　昭和62年３月

編　集　財団法人八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市清水町１丁目２番１号
0729－94－4700

印　刷　株式会社やえの里タイプ

006